

ISSN 0910-3090

國語問題協議會報

平成三十年五月十三日發行

國語國字

第百九十號

目次

第八十一回講演會

數學と言葉

河田 直樹 1

日本製漢字の製作と定着過程

笹原 宏之 13

中學校高等學校國語の現状と問題點

佐藤 健二 23

追悼 宇野精一先生

小田村四郎、林 巨樹、石川 忠久

田中 佩刀、駒井 鐵平、安東 路翠

松岡 隆範、大口 道雄、市川 浩

川畑 賢一、安田 倫子、谷田貝常夫

會員寄稿

言葉の雜學(十)

鹽原 經央 55

話言葉と書言葉

土田龍太郎 59

漢字・漢語と日本

加藤 淳平 62

だぢづでどのお話(第一回)

高田 友 66

聖書に於る國語問題(その八)

松岡 隆範 70

活字時代の終焉

上西 俊雄 73

蛾と蝶の「混同」

中村 保男 76

會員通信

書評

愛甲次郎「世にも美しい 文語入門」

桂 重俊 80

山崎肇「日本語の泉」

上村 知己 82

和歌

編輯後記

谷田貝常夫 85

題字

近藤 祐康

數學と言葉

河田 直樹

私は普段、豫備校で數學を教へてゐます。今年の三月まで代々木ゼミナールといふところで教鞭を執つてをりました。そこで二十五年やつてきて、今は別の豫備校で教へてをります。今日の演題は「數學と言葉」といふことになつてゐますが、本日は私の普段思つてゐること、或いは感じてゐることを種々御話させて頂きたいと思つてゐます。

ところで「神道」は日本の根本的な原理を解き明かすものだといふ風に言はれてをります。そして神道の奥義は、言語によつて論理化していくことを極力避ける傾向があるといふことを伺つたことがあります。數學は、それとは全く逆の行き方をします。その邊が非常に面白いなど私は常日頃から思つてをります。西田幾多郎さんの門下でいらつしやる下村寅太郎さんといふ方は、「數學の形而上學的系譜」といふ論文で、次のやうなことを仰つてゐます。「數學の成立こそは人間文化の歴史に於ける非常な事件、正しく

世界的事件だ」と。これはどういふことか、私なりに考へるところによりますと、數學が成立することによつてはじめて現代社會が出来上つたのではないかと。確かに交通、文化、軍事、經濟或いは通信、建築業——世界のあらゆるインフラの中に數學が入り込んでゐるのは事實であります。ですから、もし數學が成立しなければ、我々の社會は今とはだいぶ違つたものになつてゐるのぢやないかなと思ふ譯です。

さて、話は急に飛ぶんですが、オスヴァルト・シュペングラールといふ人が『西洋の没落』を書いたことは御承知だと思ひます。私はこれを讀む前は、この本は單純に西洋文化の衰頹或いは没落を書いたのだと思つてゐました。これは第一次世界大戰末期に出版された本で、それまでにこの世界に現れ出た文化文明のある種の形態比較論です。歴史、政治、經濟、宗教、自然科学、藝術、ありとあらゆる分野に亘つて非常に興味深い考察をしてゐる本ですが、初めてこの本を讀んで、第一章に數學の話があることに驚きを感じたことがあります。かういふ本が數學から始まつてゐるといふのは非常に示唆的な感じがしたわけです。ここでシユペングラールが何を話してゐるかといふことなのですが、かいつまんで申し上げますと、數學は、基本的には「人類共

通の普遍的な唯一の存在」であるといふ神話を我々は持つてゐる譯ですが、シュベングレーは、實はさうではない。「人類共通の普遍的な唯一の數學」といふのは存在しないのだ。そして各文化文明のシステム内で知のエートスと云ひますか、それに合致する數學のみが存在するのだと言つてをります。

確かにこれは非常に面白い知見でして、シュベングレーは數學を印度型、アラビア型、ギリシア・ローマ型、近代西歐型の四つに分類して、それぞれについて考察をしてをります。なるほどなあ、と私は思ひますし、數學は普通のかつ論理的で「唯一性の神話」が世間に流布してゐますが、さういふ通念を打破するに十分なものがあつて、非常に衝撃を受けた記憶があります。實は日本に於ても、有名な數學史家の伊東俊太郎先生が、數學を分類していらつしやる。「現代數學」を除いて十個に分類してをられます。これは一九七八年當時なんです、まづ一つはバビロニアです。二番目はエジプト、三番目はギリシア、四番目がローマ、五番目が印度。昨今いろいろ話題になつてゐる印度です。六番目がアラビア、七番目が中國、八番目がマヤ文明のマヤ數學、そして九番目が、近世から近代にかけてのヨーロッパ、十番目がいはゆる日本の數學。こんな風に分類して

をられます。これにもう一つ「現代數學」があるのですが、これを除く十個の數學について伊東俊太郎先生は、非常に計算技術を重視した理論的な數學、操作的な數學すなはち文字の操作を重視した數學、更に論證を重視した數學、さういふ觀點から分類をされてゐます。

そこで伊東先生が仰ることには、私も大體その意見に賛成なのですが、バビロニアやエジプト、ローマ、更に中國、マヤ、日本といふのは單に計算技術を重視した數學だといふ風に捉へることが出来る。印度、アラビアでも多少論證といふのが重視されてゐますけれども、やはり文字ですね、その文字の基本操作を重視した數學だ。更にギリシアといふのは非常に特異な數學だ。ここで初めて論證が重視される。ギリシア數學は非常に論證を重視した數學だ、と仰つてゐます。確かにギリシア數學といふのは、世界の中でも特異な數學だと言つてもよろしいかと思つてをります。

ところで、今日はギリシア數學の話をしたわけですが、その前に我が日本の數學はどうなのか、といふことに少し觸れておきたいと思ひます。江戸期には日本全國津々浦々、いろいろな和算家が登場してまゐります。關孝和とか建部賢弘といふやうな和算家も活躍します。今日、ちよつと紹介してみたいのは、福島縣に在住してをりました磯村吉徳

さんと、もう一人村瀬義益さん。この二人のコンビで面白いことをいろいろやつてみます。一六三〇年、江戸幕府が開かれて三十年くらゐ経つた頃なのですが、この二人がどういふことをやつたかといふと、圓周率を計算してゐます。計算重視の數學ですから、かなり正確な値を出してゐます。それから球の體積を計算してゐます。ちよつと御紹介してみたいのは村瀬さん。この人は吉徳さんの弟子なのですが、一體どういふ風に球の體積を計算したかを『新・福島の和算』といふ本から引用してみたいと思ひます。

村瀬は直徑十寸の球を一萬枚に薄く輪切りにした。十寸は約三十七種であるが、これを一萬枚に薄く切ると、厚さは一耗の百分の一、百分の三となる。そして村瀬は、この薄い高さしかない圓柱の體積を、全て三平方の定理を利用して計算した。上半分、下半分でそれぞれ五千枚、五千枚ありますから、五千個の圓柱の體積を計算した。そして村瀬は、この五千本の圓柱の計算に約三年間を費やした。これは現在の日本の科學技術をこれだけ發達せしめた、一つの要因ではないか。日本人は元々かういふことが非常に得意だつたと言へるのではないかと思ひますが、結果はかなり正確に出てをります。いづれにせよ、和算家達はかういふ努力をして、例へば圓周率や球の體積を計算したといふ譯です。

これは藤原正彦先生等も仰つてをられますが、それでは和算家達は數學そのものを、世界に關はるやうな、或いは彼等の世界觀に關はるやうなところでやつてゐたかといふと、さうではない。これはよく言はれますが、和算は俳句や和歌、華や茶の湯のやうに藝術や藝能の一種として發展したものでした。さういふことが確かにあつたわけです。例へば先程も取上げました下村寅太郎さんは、こんな風にお書きになつてゐます。「我が國の科學史に於て最も獨創的で且つ最も世界的意義を有する業績は恐らく和算であらう。しかし、それにも拘らず和算は何等過去の學問領域に影響を及ぼさず、寧ろ殆ど無關係であり、我々の思想史に接續するところなく、寧ろ何等かの思想を持たず、單に孤立した學藝である」といふやうなことを仰つてゐます。さういふことが起きた理由は、その背後に學問の傳統が無く——これはそこまで言つていいかどうか、恐らく西歐的な學問の理念だと私は思ふのですが、學問の傳統が無く、その根柢に學問の理念が缺けてゐたからである、と仰つてをります。

その邊をもう一つ裏付ける話として、江戸期に有名なユークリッド幾何學原本『ストイケイア』といふ本ですが、イタリアのイエズス會の宣教師マテオ・リッチ（利瑪竇）

の翻譯が享保年間に輸入されてゐます。残念ながらこの書の論理性に、當時の和算家達はあまり興味を示さなかつた。注意を引いてゐない。かういふ記述が科學技術史家の吉田光邦さんの『日本科學史』といふ本にも出てをります。いづれにせよ日本ではさういふ根本的な問題の關心があまりなかつた。さういふ意味では日本の和算といふのは、どうも計算技術、或いは操作に偏したやうな嫌ひがなかつた譯ではないと言へるのぢやないかと思ひます。これは、ギリシアを除くと、どこの數學も、さういふ傾向を持つてゐるやうです。

さて、それではギリシアの數學とは一體何なのかが當然問題になる譯ですが、ギリシアのいはゆる「知の志向性」と申しますか、ギリシア數學と他の地域の數學が決定的に違ふのはどこなのか。この邊について少し御話し申上げたと思つてゐます。私はギリシアの數學の「知の志向性」を、四つに分類してゐます。一つはアナログ志向。二番目はデジタル志向、三番目はカテゴリー志向、四番目はリミット志向、といふ風に分けてゐます。かういふ志向性は、現代の我々にも直接つながつてゐるのではないかと思ひます。確かジョン・バーネットといふ人が「科學するといふことはギリシア人的に思考することだ」と。恐るべき事をよく

言つたものだと思ひますが、そんなことも云つてゐます。

アナログ思考といふのはどういふことかといふと、類似的ですね、アナロジーといふ譯ですから類似的に物事を考へるといふことで、例へばブルタルコスの『對比列傳(ピオ・パレロイ)』なんかで見られる、歴史的人物の類似比較でも、恐らくさういふ發想があるのぢやないかと思ひます。アナログ時計といふものは、長針と短針の運動を、ちやうど太陽の周りを地球がぐるぐる公轉する、さういふアナログとして捉へることも出來ますし、アナログ式の電話は、音聲が作る空氣振動の波形の相似形だ。それを電氣の波に直接變換して遠隔地に傳へる、といふ風に考へることが出来る。いづれにしても、このアナログ志向の根柢にあるのは、現實世界の一つの事象、事物と同形の相似物を作る、といふ發想です。そして、その相似物から逆に世界を理解するといふことです。その典型的な哲學者としてタレスといふ人がゐるんぢやないかと思ひます。いはゆる「ソクラテス以前」の時代の哲學者で、紀元前六百二十年から五百五十年くらゐですが、タレスといふ人は、ピラミッドの高さを、影を利用して測つた。或いは海岸線から沖にゐる船までの距離を測定してゐる。要するにこれは比例式、AがBに對應するやうにCがDに對する、といふ考へ方で

す。これとは同時代の人として、例へばアナクシマン드로スといふ人がゐる。この人は「萬物の根源は無限な物（ト・アペイロン）だ」といふやうなことを言つてゐますが、彼は天球儀や地圖——これは現實の模型ですが、かうしたものを作つてゐます。

最後にソクラテスの議論の仕方、彼の言論は殆ど比喻そのものです。「エウテュブロン」といふプラトンの初期の作品がありますが、これもエウテュブロンといふ人に自分の主張を納得させるのに數學を利用して、現實世界と數學をきれいに對應させながら議論を進めてゐます。それからプラトンの有名な洞窟の比喻とか、或いは線分の比喻があります。要するに、これらは全てアナログつまり類比的に物を考へるといふ志向ではないか。この志向性は自然法理論の有名なフーゴ・グロテウスなんかにも、受け継がれてゐます。彼は例へばこんなことを云つてゐます。「恰も數學者達が彼等の數學を具體的な實體から抽象されたものとして取り扱ふやうに、私は法を取り扱ふ場合に、私の心を如何なる個別的事實からも切り放してきてゐるといふことを、私は些かも嘘詐ることなく確約する」とにかく法的な問題を數學と同じやうに處理して行かう、かういふ傾向は歐米文化圏ではよく見られることで、カントなんかもさういふ

ことを言つてゐます。最近だとアメリカの數學者のデーヴィスとヘルシユといふ人がゐます。「デカルトの夢」といふ本がアスキー社から出てゐますが、この本の中で「數學の及んでない分野、及ぶ可能性のない分野などどこにもない。恰も人間が重力の法則から逃れることができないうに、數學世界から逃れることは不可能だ」といふことまで言つてをります。それが正しいかどうか、は措くことにして、いづれにせよ古代ギリシアでは現實世界のアナログ、或いは類比的に物を考へる、かういふ傾向があるのではないか、といふ風に考へる譯です。

次のデジタル志向ですが、これは一言で云ひますと、有るものは有り、無いものは無いといふ考へ方です。今風に言へば、二値論理の考へ方と言つていいかと思ひますが、この代表選手がバルメニデス、それからゼノン。その二人ではないかと思ひます。その系譜に繋がる者としてメリッソスとかレウキッポスとかデモクリトスがゐます。デモクリトスは原子論の創始者として有名ですが、かういふ人たちがゐるのではないかと思ひます。バルメニデスといふ人は紀元前五百四十年から四百七十年くらゐの人です。どんな人だつたか。例へばプラトンの『バルメニデス』といふ本に出てゐます。ソクラテスやプラトンは、バルメニデス

には直接會つてない筈なんですが、プラトンはフィクションとしてソクラテスと出會はせてゐます。そこでソクラテスをして、こんなことを言はせてゐます。「パルメニデスといふ人は私の見るところではホメロスのいはゆる『畏敬すべき、また畏怖すべき人』といふ感じがする。それといふのは、私はごく若い時にあの人に會つて、ちよつと親しくさせてもらつたことがあるのです。その時あの人はもう大變な齡でした。そして私にはあの人は、あらゆる點で高貴な、何か底知れないものを持つてゐるやうに見えたのです」

かういふ風に回想させてゐます。パルメニデスといふ人は凄いい人だ、といふ印象をお持ちになれるのではないかと思ひます。パルメニデスの仕事は、百六十行ほどの敘事詩が残されてゐるのみで、それを通して彼が何を言つたかといふことを知らなければならぬ。彼は要するに、有るものは有る、無いものは無いと、かういふ議論をすることが大事だと言つたわけです。更にゼノン。有名なゼノンのパラドックスをご存じだと思ひます。「飛んでゐる矢は止つてゐる」とか、「アキレスは龜に追ひつけない」とか。これはアリストテレスの『自然學』といふ本で紹介されてゐます。アリストテレスは此等のパラドックスにいちいち反論をしてをります。が、ゼノンの提起した問題は奥の深いもので

した。今風に云ひますと、次のやうに云へるかもしれません。例へばここに1があり、ここに2がある。ここに3がある。數學屋さんはかういふのを自然數と言つたりする。ゼノンは、こんなことを言ひます。例へば1を出發した矢が2に到達するには、ちやうど此の眞ん中、二分の一を通らなければならぬ。更に三分の一、四分の一を通らぬといけぬ。かういふ風に考へて行きますと、この中には無限の點が詰つてゐる。これらの無限個の點を通過するには無限の時間がかかると。確かに私も此れと似たやうな體驗があります。小學生の時に例へば、一年生では1、2、3、・・・といふものを習ひます。そして例へば2の左鄰りは何ですか、といふやうな問を考へると、そこに「1」といふ言葉がちゃんと存在します。そして右鄰りはといふと3です。要するに「名指し」できる。つまり2の左には「1」といふ言葉が存在する。右の方にも「3」といふ言葉が存在するわけです。ところが小學校の三年か四年で分數を習ひます。或いは小數を習ひます。さうすると、2の右側は何か、と考へますと1・9かなと考へる。更に1・9の鄰に1・99がある。では、すぐ鄰は、といふと、名指し出来なくなる。「2」といふ言葉の鄰りを名指す言葉が無い。私自身も非常に衝撃的な體驗でした。何で名指しできないのか。ここまで行

きますと、物が繋がつてゐる連続とは一體何たらう。勿論、それは直観的にはそれはほとんど自明です。しかしゼノンが提起した問題は非常に大きな問題として、近代のニュートン物理学が確立されて以降、例へばライブニッツなんかが生涯に互つて考へたテーマになつてくる譯です。

連続といふ概念は、たかだか百三四十年前に初めて確立された概念で、實はそれまではよく解つてゐない。少なくとも數學的には解つてなかつたと言つていいかと思ひます。私はこのパルメニデスの仕事をもつて、やはりギリシア哲學を完全に分つ、分水嶺になるのではないか、といふ風に考へてゐます。よく「ソクラテス以前の哲學」「以後の哲學」と言ひますが、實はさうではない。寧ろ私はパルメニデスが、この人こそがギリシア哲學を分ける分水嶺に當るのではないか。以後、ソクラテス、プラトン、アリストテレス、全部、彼の影響を受けてゐると言つても過言ではないのではないかと思つてをります。アナクサゴラス、エンペドクレスといつたやうな人達も同じやうな發想でやつてゐます。いづれにしても、パルメニデスといふ人は非常に大きな仕事をしたのではないかと思ひます。やはりこの「0と1の二値論理」と言ひますか、今日例へばDVDなんかも、0と1で全部事象を記述してゐますが、さういふ根本にある

のがこのエレア派のパルメニデスの仕事ではないかと、かやうに考へてゐます。

三番目の話なのですが、いはゆる「カテゴリー志向」です。カテゴリーといふのは元々「述語形態」といふ意味ですが、我々は普段「範疇」といふやうな意味で使つてゐます。これは一言で言ふと、集合の論理を通して物事を考へようといふ志向性なのです。とりあへずかういふ風に考へて頂ければいいでせう。具體的に、古代ギリシアのどこにさういふものが見られるのか、實はこれも先程觸れたのですが、プラトンの初期對話篇に「エウテュプロン」といふのがあります。ここでソクラテスが非常に面白いことを言ひます。「恐れあるところ、敬ひもある」といふ詩人の言葉を取上げて、これはをかしいんだ、論理的に變だ。ソクラテスはこのエウテュプロンといふ人に言ひます。その論據は何かと云ふと、ちよつと話が飛びますが、普通數學では、例へば大學生の集合と東大生の集合——こんな風に理解することが出来る。ある人が東大生であるならば、當然、大學生であると言へる。残念ながら大學生であるならば東大生と言へるか、といふと、これは言へない。かういふ集合の包含關係があつて初めて東大生ならば大學生と言へる。ソクラテスはこのやうに言ひます。恐れのない人——恐れのない集合

と、敬ひの集合を考へると、こんなことは言へない。ではどういふことか。恐れれの集合と敬ひの集合を考へると、(板書) かういふ風な關係があるのだ。したがつて、敬ひあるところに恐れがある。「恐れれの集合(=大學生の集合に相當する)」は「敬ひの集合(=東大生の集合に相當する)」より大きくなる。だから、これは詩人の論理的誤りだ、と指摘してゐます。

ニーチエは『悲劇の誕生』でソクラテスを「意識の異常發達、論理的に異常に發達した人」と呼んでゐますが、確かにかういふやうな指摘をされるとシヨックです。しかもエウテュブロンはかういふことを言はれても理解しないものだから、ソクラテスは盛んに比喻を使ふ。どんな比喻を使ふかといふと、數——數學では自然數と言ひますが、もう一つ奇數、つまり數のあるところに奇數がある、言ひ換へれば、自然數であればその數が必ず奇數と斷言するのはをかしい。奇數があるところに數がある。つまり、それが奇數ならば、それは自然數であるといふのは正しい。これなら解る。それと同じことが「恐れ」と「敬ひ」についても言へるんだ、といふ風にして説得して行く譯です。なるほどソクラテスは數學的論理を類比的に用ゐてゐます。此やうな志向性は更にアリストテレスに引繼がれて參ります。

アリストテレスは『オルガノン』(「道具」と譯されてゐます)といはれる著作を残してゐますが、その中には「カテゴリー論」「命題論」「分析論」などがあります。アリストテレスは、論理的に考へるといふことはどういふことを徹底的に考へてをります。今日「排中律」とか「矛盾律」、或いは「推移律」といふやうな論理的な原理原則が我々のものになつてゐるのは、正にアリストテレスのお蔭です。例へば二つの數A、Bがあるとします。數學屋さんには、このA、Bについて、AとBが等しいか、AがBより小さいか、AはBより大きいか——この三つが成立つことを前提にします。ここにはアリストテレス流の論理が背景にある。ここで詳しいことを申上げる譯に行きませんが、これに異を唱へたブローエルを始めとする直觀主義者と云はれる人たちもゐます。かうした主張の背景には無限の問題があるのですが、そんなことを言つてゐます。しかし、ともかく我々はアリストテレス流の「排中律」や「矛盾律」に依據して物事を考へてゐる。論理的に考へるといふことは要するにさういふことです。カントは「アリストテレス以後、論理學は一步も進歩しなかつた」と云つてをりますが、これは些大袈裟ではあるのですが、しかし裏付けがない譯でもありません。いや非常に納得の行く話です。特にアリ

ストテレスは、例へば命題ですね。命題そのものも「命題論」に出てみますが、彼はその中で「命題」といふ言葉を厳密に定義してみますが、さういふものを一つ取つてもこれはアリストテレスのお蔭です。それから矛盾律とか排中律、これもアリストテレスが厳密に定義してみます。

例へば矛盾律をこんな風に言つてみます。これは「形而上學」といふ本の第三章に出てみますが、「同じもの（同じ屬性・述語）が、同時に同じ事情の下で同じ主語に屬し、かつ屬しないといふことは不可能である」。かういふ原理が矛盾律。排中律についてもこんな風に言つてみます。第七章の冒頭の部分なのですが、「二つの矛盾したものの中には如何なる中間のものも有り得ない（「排中」といふのは中間のものを排するといふ意味です）。そして何かある一つのものを肯定するか否定するかのいづれかである」。こんなことを言つてゐるのです。いづれにせよ、このアリストテレスの論理學といふのは恐るべきものではないかと思ひます。このカテゴリー志向は、既に二千年以上も前にソクラテスがはつきりと自覺してゐた譯ですが、これを初めて知つた時には非常に衝撃的でした。よくぞこんなことを考へたものだ。なるほどギリシア文化といふのは凄じいものだ、といふ風に感じた次第です。

四番目の「リミット志向」なんです。これは物事を徹底して考へる。極限を追ひ求める、と言つてもよろしいかと思ひます。これも下村寅太郎さんが仰つてみますが、古代ギリシアといふのは無限といふものを非常に嫌ふ、忌避する。或いは限定されてゐないものを排除し、回避する。我々近代以降の人間は、無限のものを「有限以上のもの」といふ風に理解しますが、ギリシアではさうではない、といふやうなことも仰つてみます。確かに古代ギリシアの無限の數學的な捉へ方を見ますと、その邊、大變注意深く扱つてをります。その極限志向として例へば、ちよつと専門的になりまして申し譯ありませんが、例へばアンティポーンといふ人が圓を方形化する、この圓と同じ面積を持つた、かういふ正方形を作るにはどうしたらいいか、といふことを考察してゐます。（板書）その時にこの圓周を等分して、ここに三角形を、またかういふ風な四角形を作り、更に何等分かします。更にこの間を何等分かする……といふ風にします。三角形を四角形にするのは簡單ですから、かういふ風に考へて行くと、與へられた圓の面積と等しくなるかういふ風な正方形ができるのぢやないか。そんなやうに考へた譯です。

ここで非常に面白いのは、日本の和算家が圓周率を考へ

るに當つて、同じやうなことを考へてゐるんですが、ちよつと違ふところがあります。例へば圓周の長さを求めるに當つて、和算家達は一應、内接多角形を考へます。邊の長さをほとんど小さくしてその總和を計算する。和算家たちの興味關心は、とにかく一所懸命計算して正確な値を求めるところにだけあります。ところがギリシアでは實は、かういふ風に不等式で挟んで行くわけです。小さいもの、大きいもの。これとこれの極限を考へて、この邊が近代の微積分に繋がつてくることになるんですが、それで初めて極限値これが保證されるんだと。この言ひ方はちよつと誤解を招く部分があるかもしれませんが、ともかくかういふ風な考へ方をする。いづれにせよ、古代ギリシアではいはゆる「取り盡し法」によつて圖形の面積を求めてゐる。或いはアルキメデスも「取り盡し法」によつて、例へば拋物線と直線で圍まれた圖形の面積を求めてゐます。彼等は正確な値を求めることのみならず、その値の「存在」そのものに關心を持つてゐます。

それから、いはゆる平行線の公理についても非常に注意深く取り扱つてをります。ご存じのやうに、ここに直線がありますと、直線外の一點を取つてこれに平行な直線を引くと、どこまで行つても交はらないといふことがある譯で

すが、ギリシアの數學者達はいかゞいふ風な無限が顔をのぞかせる命題に非常に懷疑的な眼差しを既に向けてをります。無限といふのをかなり意識的に避けてゐる、といふことになるかと思ひますが、それがかへつて、ギリシア人たちの「無限、極限」への秘められた志向性を物語つてゐるやうに思はれます。

さて、種々話して參りましたが、最後にここで數といふものについて少し御話しさせて頂きたいと思ひます。

どういふことかと申しますと、ここがギリシア數學と他の數學の決定的な違ひではないかと私は思つてゐます。ご承知のやうにアリストテレスの『形而上學』といふのは、次のやうな話から始ります。「正方形の一邊の長さ a と對角線の長さ b が同じ單位で測れないことは、驚くべきことだ」

アリストテレスは、哲學といふのは世界に對する驚きから始る、と言つてゐます。そして、その驚きの一種として例へばこの線分（正方形の一邊）の長さ a と、この線分（正方形の對角線）の長さ b は同じ單位で測れないといふことを持ち出すわけです。中學生の頭を思ひ出されて、例へばこの長さ a なら、これが「ルート2」だといふやうなことを憶えておいでの方もいらつしやると思ひますが、それはさて置き、大切なのは、この線分の長さ a とこの線分の長

さが同じ単位では測れないといふことです。例へばここに十五種の長さの線分がある。またここに九種の長さの線分がある。そこで九種の線分を三等分する。そして十五種を五分分します。さうすると、ここに同じ長さの線分(これを単位とすれば、前者の線分は3、後者の線分は5といふことができる)が現れます。ところが非常に不思議なことに、この一邊の長さ、この對角線を、どういふ風に分割しても同じ長さの線分が現はれないのです。例へばこれを百等分し、これを百四十二等分しても同じ長さが出て来ない。實は、これが一番不思議なことです。アリストテレスは正にこれを非常に不思議なことだと述べてゐるのです。

高校の入試や大學の入試では「ルート2が無理数であることを證明しなさい」といふやうな問題がよく出ますが、そんなことはどうでもいい。證明は驚きから始つてゐる譯で、その驚きがないのに、ルート2は無理数である、いはゆる背理法によつてこれを議論してもしやうがないと、私はかやうに思つてをります。

更に數といふもの、或いはその「言葉」は、先程ゼノンのパラドックスで申上げましたけど、大變不思議だと私は感じてをります。例へばここが1で、ここが2で、ここが3だとしませう。いま「分割」といふ行爲を行ふとします。

そしてどんどん分割して行き、新しい數をつくります。1と2のちやうど眞中にあるこの點を表すには我々は分數を用ゐます。つまり2分の3です。この點もこの點も分數で表すことができます。しかし不思議なことに點を全部名指したつもりになつても、私たちは數直線上の點を全部名指すこと(言語化すること)が出来るか。實は不可能なのです。上のやうに分割して得られた點を表す數を「有理數」と申します。實はこの有理數だけで數直線上の點を盡くすことができるか、と言へばそれは不可能なのです。實際ルート2とかルート3のやうな無理數は「有理數」の世界には存在しません。そこで、有理數の世界に無理數を付け加へて實數といふ世界を考へなければならぬ。さうするとここに無限の問題と連續の問題が立ち現はれてきます。この無限とは一體何だ。實數を更に付け加へた無限といふのは一體何だ。ゲオルグ・カントールといふ數學者は有理數の無限と、無理數も全部含まれた實數の無限とは違ふんだ、といふやうなことも言つてゐます。更に厄介なのは連續の問題があります。例へば、先ほども申し上げましたが2のすぐ鄰は何か。言語でどうしても言ふことが出来ない。名指しすることが出来ない。これは非常に厄介な問題で、ただ數學だけの問題ではない、と私は思つてゐます。

先程ライブニッツはこの問題を生涯に亘つて考へ續けたと申上げましたが、實は日本の哲學者の西田幾多郎さんも最晩年に至るまでこの問題をずゝつと考へていらつしやつたやうです。西田さんには「意識について」といふ大正九年に發表された論文があるのですが、やはりこの有理數の問題と無理數の問題ですね。これについて随分突つ込んだことを考へていらつしやいます。有理數は實は單に「考へられたもの」であり、それに對し「無理數」は人間の「考へる作用そのもの」といふ風に述べてをられます。私は非常に共感するところがありまして、西田哲學といふと、すぐに「絶對矛盾の自己同一」とか「善の研究」とか、何か厳しく物々しい感じがするんですが、實際に當つてみますと、西田さんといふ方は非常に新しいことを御考へになつてゐる、といふ氣が致します。

ライブニッツがさうだつたのですが、ライブニッツは若い頃デカルト的な「機械論的自然觀」に共鳴してゐましたが、中期以降のライブニッツはこれを否定します。やはり、唯物論ではどうにもならない、意識、魂、人間の精神的な側面に目を向けなければ「無限や連續」の問題は解明できない、ライブニッツはかう考へてゐたやうです。そのあたりの消息は、西田さんが仰つてゐる「無理數は意識の作用だ」

といふことと重複するのではないかと思はれますが、結局我々は物質だけではなくて數の世界に於ても、人間の意識、精神が非常に重要な役割を果してゐる。かういふことではないでせうか。數學といふのは一見、人間とは關係ない場所で成立してゐると思はれてゐますが、かうやつて考へてみますと、數一つを取つても、やはりそこに人間の意識の反映と言ひますか、人間の根源的な問題、事物、事象と言葉の問題等が、かういふところから見え隠れするのではないか、といふ風に考へてをります。

(かはたなほき・豫備校講師)

日本製漢字の製作と定着過程

笹原 宏之

本日は、國字といふもの、日本製の漢字について御話を申上げたいと思ひます。漢字は中國製のものであつた譯ですが、日本に傳はつて以來、日本人は日本語を書き表す爲に様々な努力をして來た譯です。その一つに、日本人自らが漢字を造るといふことがあつた譯で、それは大きな出來事であつたのですが、國語學といふ分野に於て——他の分野に於てもさうなのですが——國字に關しては、扱つたとしても、研究には平面的なものが多いといふ嫌ひがあります。歴史的に國字といふものを見た場合に、どういふことが言へるのか、國字一つ一つに、定着なり改善なりの過程が見えるのではないかといふことを或る程度端折りながらお話ししたいと思ひます。レジュメは三頁ありますが、先づ一番の「國字と漢字」といふところから御覽下さい。

先づ「國字」と書いた部分、これは有名な新井白石の『同文通考』です。日本製漢字についての本格的な研究は十八

世紀の『同文通考』から始ると考へられてゐます。現在に至るまでこの『同文通考』の影響が強い譯で、日本製漢字と中國製漢字を區別するといふ非常に劃期的な視點が示されたのですが、歴史的な視點、考察といふものが十分ではないといふ缺點があります。

隣には「魚偏に弱」と書いて「鰯」といふ有名な國字を示してありますが、ここに貼込んであるのは平城京から出土した木簡の寫眞です。上から三分の二邊りのところに、魚偏に弱といふ字が、若干筆で崩した形になつてゐますが、出てゐます。鰯といふ字は、實は奈良時代には存在してゐたことが、正倉院文書などを精査しますと幾つも例が出て來ます。ところが『古事記』、『日本書紀』、『萬葉集』など上代の文獻をいくら調べても、そもそも鰯といふものが殆ど話題になつてゐません。上代文獻には登場しませんが、木簡なり正倉院文書では、はつきりとした形で書込まれてゐます。國字を造り出してきた日本人の營みといふものが早かつたことが窺へます。なほ、この鰯といふ以前の段階では、例へば藤原京から木簡が出土してをります。ここではイワシが獻上品の名前として出て來る譯ですが、色々な萬葉假名でイワシと書かれてをります。どうも、奈良時代に入るか入らないかといふ頃に日本人の間で、あるいは渡

來人が介在してゐた可能性もあるのですが、國字を作り出すといふ行爲があつたことが窺へます。

その隣には虫偏に廚房の廚(蛸)といふ字が入れてあります。これは『萬葉集』に出てくる字で、「蜘蛛」と合せてクモといふ字です。クモといふのは蜘蛛チチモといふ、かういふ漢字がある譯で、それと異體字のやうに見える譯ですが、この虫偏に廚の蛸といふ字は他ではなかなか見つかりません。その爲に、この字は國字ではないかと長らく言はれてきました。確かに中國の辭書をいくら調べてもこの字は出て來ない。けれども、唐の時代の御經を調べてみると、この字が「蜘蛛」に續くといふ文字列で登場してをります。つまり儒教の經典にある漢字だけが日本の上代に影響したといふことではなく、佛典に使はれてゐる文字が、當然ですが萬葉人の知るところとなつてゐたやうです。さういふことが起つてゐたことが判ります。國字のやうに見えますが、實際には中國製の漢字であると。それが本家の中國で少し現れなくなつてしまつたばかりに、さういふ誤解が生じてゐると言へます。

また、その隣には、人偏に西の國と書く文字(儻)があります。これは實際、今でも青森縣では地名として現存してゐて「儻澤」の地名が青森縣東北町で使はれてゐました。

「ほとけざは」と讀みます。「西の國の人」でホトケといふのが、いかにも日本製漢字のやうな趣があつて、『國字の字典』などを見ますと「國字」として扱はれてゐます。少し遡ると江戸時代、例へば馬琴の『八犬傳』にこの字がホトケとして登場します。國字のやうに見える譯ですが、中國の色々な書物を調べてみますと、道教の經典などにはかういふものが使はれてゐた證據が出て來ます。これは上代までは遡らないやうですが、元々道教を信仰してゐた人達がかういふ字を造つて使つてゐたことが窺へます。かういふものが出て來る背景には、道教では仙人の仙といふ字を「儻」と、かういふ風を書く。字の成り立ちから言へば、右上は「西」、かういふやうになる譯ですが、現實の運用では筆で書くことが多かつたために、人偏に「西」などと書いたセンがあつて、そして、ここに「國」が來ればホトケ様だと。通俗的な解釋が字面から行はれた結果と考へられます。このホトケといふ字も中國製の漢字といふことになりません。

その左側には、これは國字とは言へない、言ふなれば日本製の異體字、形だけが變化した文字を取上げてあります。「圓」といふ漢字は、本來は國構へに「員」と書くものが正字と言はれてゐるものですが、日本に傳はつてからかな

り早い段階で非常に大膽な省略がなされてゐます。そこに貼込んであるのは『日本の漢字』といふ小著から引いて来たものですが、空海が書いた肉筆には、國構へは書いてあるけれども、中を縦線一本で済ませる非常に大膽な略字が見られます。中國にかういふものがないかと探してゐるのですが、まだ見つかりません。日本でいきなりかういふ大膽な略字が書かれたのです。これは歴代の文獻を觀察してゐると動きを呈します。少し紹介しますと平安時代は殆ど國構へに縦線一本で書かれてゐますが、鎌倉時代くらゐになりますと、これ(□の三畫目)が若干上に上り始めます。

(板書) こゝまで伸して下で閉ぢるといふのは、筆の動きとしてやや不自然です。室町、鎌倉時代の寫本になりますと、もう殆ど現在と同じくらゐの高さにせり上がつて來るといふ面白い動きが見られます。江戸時代には、現在と殆ど同じ略字「円」が使はれてゐる譯です。

この下に貼込んであるのは明朝體活字の變遷を記した資料ですが、それが百五十年くらゐの間に活字の世界でも再現されてゐます。手書きの世界では何百年もかけてせ



「円」の活字形の変遷(文化庁文化部國語課編『明朝體活字字形一覽』平成11より)

り上つて來た譯ですが、明朝體の世界では、それよりかなり遅れて十九世紀の末くらゐには平安朝の手書きにあつた字體から次第にせり上がつて行つて戦後の略字になる。殊に「圓」といふ字は平安朝より佛典によく出てくる。この省略を定着に向はせた要因は戦後、或は明治以降は逆に佛典ではなくお金の單位として「円」といふものが採用されたといふことでせう。これが記號のやうに日本獨特の略字を定着させた要因であらうと思はれます。そして必要度に應じて形が變るといふことが觀察出來る譯です。

さて、その隣は一轉して相當畫數が多いものが印刷してあります。鏡が四つあるものです。普通「一番畫數の多い漢字は何か」が話題になつた時に、それは「龍」を四つ書く六十四畫の字が『大漢和辭典』にあつて、また「興」といふ字を四つ書く字もある、といふやうなことが話になります。しかし日本の様々な文獻を調べてみますと、より畫數の多いものも見られます。ここでは宮澤賢治の亡くなつた後に見つかつた手帖に書かれてゐた詩の中に「若手輕便鐵道の一月」といふのがあるのですが、そこに帖込んである後半のところには「はんの木アルヌスランダー巖をつるし」とあります。「かがみ」と讀むといふことは、どうも前段階の原稿が「鏡」と書いてあるといふ狀況證據から認めら

れます。鏡を四つ書くといふ異例のことをしてをります。これを一文字と認めれば七十六畫ですね。大變な造字といふことになります。さて、このこれは賢治が造つただけであつて、一つの作品の中で完結してゐるのだから文字とは言へない、といふ見方も出来ると思ひます。私は言葉を既に表してしまつてゐるといふことで、文字としての資格は強く持つてゐると思ひます。その一方で社會性が乏しいと。文字は社會性を帯びてゐなければ文字としての資格を持たない譯で、その矛盾する狭間にある文字として、かういふものは個人的な文字「個人文字」と名付けてをります。大抵は氣付かれずにあるけれども個人で文字だと思つて使つてゐるといふことになります。

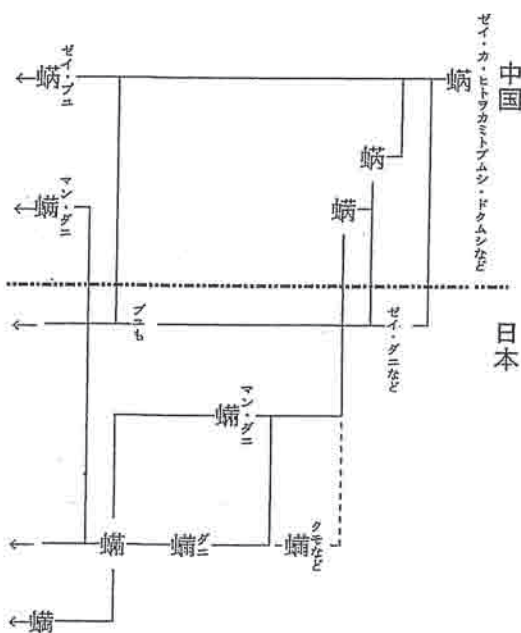
次に「國字の時代差」といふことについて御話ししたいと思います。思ひます。「鱻」などといふ字も奈良時代からあつた譯ですが、國字は奈良時代に一度に揃つた譯では全くありません。早いものは奈良時代以前からといふことができますし、遅いものは明治以降、大正時代以降に生まれて辭書に載つたと思はれるものもあり、つまり歴代の日本人が日本語を表記する必要に應じて漢字を應用して造るといふことをして來たと言へます。

此處に擧げてありますのは、一つの漢字が次第に姿を變

へて行つて、國字と呼ばれるに至つた経緯を非常に簡單ですが、まとめたものです。元々、ここに擧げてある字は、ダニといふ蟲の名前を表す、虫偏に満ちるといふ字の旁を書いたもの（蠃）ですが、ダニについての本などを讀みますと實際にかういふ字が出てゐて、ダニは人の血を吸つてふくれるので旁を「兩」と書くのだと。さすが國字といふものは、さういふ會意文字が多いのかなと思はせるやうなことが書いてある譯ですが、實際に過去の文献をしつこく當つてみますと、さうではなくて、元々は中國製の漢字であつたと。虫偏に草冠、その下に内側の「内」と書き「ゼイ」と讀む漢字（螞）があります、これが人に噛みつく飛んで來る蟲とか人をさす毒蟲を表す文字として存在してゐた。この螞といふ字自体は平安時代以前から日本に御經などを通して傳はつてゐた譯ですが、これが元々安定性の乏しい形であつたために様々な異體字が生れます。草冠の四畫なども實際に筆で書く場合は三畫に書くことが多かつた。内といふ字も「入」といふところが「人」で書かれるといふこともあつた。

上代、中古、近世に至るまで日本の寫本文化といふものは楷書ではなくて行書、草書で書かれることが多かつた。そして、行書、草書を見ながら楷書體に復元するといふこ

とも行はれてゐました。その結果、字體がどんどん變轉する。しかも蝸などといふ字は普段使はない字ですから、崩した形があつた場合に、これは實際どういふ形なのかを考へながら楷書體で書くといふことが行はれた。その結果、平安時代、鎌倉時代くらゐから俗解が始つて、虫偏に満ちるといふ字の右側なんだらうといふ解釋が生まれたやうです。また、虫偏に草冠に雨(蝸)だとも。



佛敎説話『沙石集』の寫本などにダニとアリがお互ひに問答するなどといふ話がある譯ですが、さういふところにかういふものが出て来る。寫す時に、この崩し字はきつとこれなのだ、と様々に推測がなされ、さういふ譯で變遷を経て、何時の間にか、この字がダニだと。この字は『沙石集』の寫本には、わざと音讀みまで振り假名でつけて、それは完全な通俗的な解釋であつて、虫偏に「滿」ちると。滿といふ字は「マン」といふ字でマンといふ意味を持つはずだといふ解釋で、ここまで来ると完全に「ゼイ」と「マン」で、一つの字が枝分れしたといふ結果が出てきます。その結果、現在では漢和辭典を見てもゼイとダニの間に異體字であるとの情報が付いたものは殆ど見られない。全く別の字といふことになつてをります。もともと新井白石の研究などといふものは一字一字の來歴まで尋ねるといふことは餘りしなかつた譯ですから、かういふものが今の今まで置き去りになつてゐたといふ現實があります。國字にも時代による差が存在するといふことが言へます。

三番、「國字の地域差」といふところに移ります。國字は地域ごとにも多様だと言へる譯ですが、ここでは「崖」といふところを御覽下さい。崖といふ危険な場所がある譯ですが、「ガケ」といふ言葉自體は實は日本語の中で比較

的新しく生まれた言葉のやうで、文獻にガケ（古くはカケ）といふ言葉が現れるのは鎌倉時代になつてからのやうです。現在ではガケはこの字（崖）を書くのが常識になつてゐます。常用漢字には入つてゐない字ですが、誰もが「崖つぶち」などと書いてあれば自然と讀めるといふ譯です。しかし、この字がガケといふ訓讀みを持つに至つたのは江戸時代の半ば、やつとこの字とガケといふ大和言葉が結び附いた譯です。

それまではどうしてゐたかと言ふと、ガケといふ言葉はある、どの漢字を當てたらいいか誰にも判らない、といふ狀況が續いてゐました。そして實際、試行錯誤が様々に行はれてゐた。例へば源平盛衰記などを見えますと、ガケといふ言葉は出てくるけれども、この漢字は古くは全く見つかりません。やつとガケといふ漢字を見つけたと思ふと、かういふ、とても普段は使はないやうな字（殘）が中國の辭書から見つけられてガケとして登場します。中國の辭書を見ると確かに「山の切り立つた所」とか「水邊の峻しいところ」とかいふ意味があつてガケと當てるのは尤もだと。ところが『太平記』などを見ますと、さうではない。山偏に兪の「嶮」、これをガケと讀ませるものがあります。寫本によつては嶮の「岨」をガケと讀ませる。つまり中

世はガケといふものに對するびつたりの漢字が見つからない、摸索されてゐる期間であつた。これはほんの一例ですが、山偏に谷（峪）と書いてガケと讀ませる、さういふ『太平記』の寫本もあります。『太平記』は寫本によつてガケは見事に漢字が替つてゐる。日本人は大和言葉が存在すると、名詞は漢字で書きたいといふ意識が傳統的にあつたやうです。

ただ、それが一番びつたりの漢字か、といふところで、多少、中國の漢字の意味を變へてまで宛つて行くといふ試行錯誤が見られます。プリントにある「土偏に付」といふ字（坵）は、福島縣の小さな地名に於いてガケヤシキのガケとして使はれてゐます。福島市で調べてみたのですが、明治初期まで廻れる地名でした。これは中國ではガケなどとは全然合はない字で、恐らく中國の人がガケと思つてゐるキ（圻）といふ字の旁が「付」によく似た崩し字を書いてゐるといふことがあつた。どつちがどつちなのか判らない。草書を書いてゐるが、どちらだか判らないままで誤つて定着したのだらうと思はれます。

東京のそばでは埼玉の八潮市に「土偏に行」（圻）と書いてガケと讀ませる所がある。これ大字ですから人も住んでゐます。住所としてもガケといふ所があるのですが、こ

の「圻」が變化して更に變化したものと思はれます。そして何か意味ありげな、土偏に行といふ字でガケと讀ませる。これは地域獨特の國字、この字を使つてゐる地名は日本中で埼玉縣以外にない譯です。逆に言ふと、そこにだけあつたお蔭でパソコンでも打てるやうになつてゐる、つまり「JIS漢字」に採用されてゐるといふことです。

ガケといふ字一つを取つても、日本人の苦闘の跡が窺へる譯ですが、その隣には、ガケよりも古くから日本の文獻に登場する、殆ど同じ意味でママといふ言葉を表す國字が三つ並べてあります。このママは、『萬葉集』で「眞間の手兒奈」といふ可愛らしい女の子が餘りにも可愛らしいので男性から替はる替はる求婚されて、それを苦に身を投げたといふ話が千葉の市川のこととして傳はつてゐます。このママは崖を表す上代の東日本の方言です。現代に至るまでママといふ言葉は東日本で崖といふ意味で觀察され、口語ではよく使つてゐた譯ですが、漢字がうまく定着しないまま來た譯です。各地の日本人が、それでもママといふ言葉は何か物の名前を表してゐる、現代風に言ふと名詞であると思ひ、名詞には何かの漢字を宛てたいといふ意識があつたと思はれます。

例へば、そこに地圖が貼込んでありますが、神奈川から

伊豆半島、駿河、愛知の三河に至るまでの小さな地圖を使つてゐます。そこで四角(□)で示してあるところが酒匂川の邊りに集中してゐます、これが「我儘」の「儘」の人偏を土偏に置き換へた國字(儘)である譯ですが、神奈川にしか見られない地名がそれだけ見つかります。小田原にも見られます。これは我儘な人間ではない、土の状態なので土偏に變へたのだらうと思ひます。

また伊豆半島を御覽いただくと、「○」で示された地名が散見されます。これは土偏に間(埧)、これも「まま見られる」といふ時に「間」を使ふので、それに土偏をつけ「埧」。稻取の邊りにはかういふ地名もありますし、伊豆半島には、御會ひして來ましたが、苗字でこのローカルな漢字を使つてゐる埧中さんといふ方が住んでをられます。

そして、駿河の邊りはバッテン(×)とか長い四角とか、これは片假名表記であるとか萬葉假名表記であるとかのものです。ずつと天龍川を越えて濱名湖の邊りまで行きますと、今度は三角形(△)で示したママといふ地名が見つかります。この三角形の邊りは「土へんに重」(埴)といふ字を書く地名が見られ始めます。そして三河の地に入りますと、それが非常に澤山見られる。つまり、ママとい

ふ言葉は共通なのですが、それを表す漢字が見當らなかつた。その爲にその價值を感じる人々が中國の漢字では足りない、日本の漢字を造り出さうと地元地元で工夫した結果が、かういふ小地名の表記の搖れに繋がつてゐると思ひます。

近年の政策の關係で、かういふ小地名はなるべく使はないやうにしようといふことになつてきた。大字小字が地方に澤山あつて、それぞれの古い豊かな日本の言葉が使はれてゐる譯ですが、さういふものが郵便配達の人に邪魔になるとか、圍場や區劃の整理の時に邪魔になるとかいふ、大變残念な狀況があります。それと共に、かういふものがないだんに少なくなつて來ます。土偏に山(山)といふ素朴な字が山形縣でママ地名に使はれてゐたのですが、これは近年、平假名に變更されてしまつたといふことです。

その隣にある、「山冠に女」といふ字は滋賀縣にある地名ですが、これは一部で有名になつてしまひましたけれども左下に貼込んであるやうにアケンバラといふ地名が元々あつて、これを『國土行政區畫總覽』といふところで印刷しようとした時に、活字が無いので「山」と「女」を貼り合せた。さうしたら山と女の間影が映つてしまつた。その結果、それを誤解した人が「一」と間違へてJIS第二

水準にはこの形(妄)で入つてしまつた(笑)、現在、幽靈文字と呼ばれるものです。これもずつと分らないことだつたので、二米くらゐ積まれた資料を調べて一米くらゐでやつと見つけた、さういふ例でした。「JIS」で使ふ漢字といふのも、かういふ誤りが含まれてゐるといふことが判ります。

最後の一枚ですが、國字は様々な歴史のドラマを持つたものである譯です。「山冠に女」と書いて「アケビ」といふのも日本人のおほらかな思想が産み出したものであつた譯ですが、かういふものは何時の時代にもありました。特に一番國字がよく見られたのは江戸時代だと思ひます。ここにある、竹冠に手偏を書いて金といふ字(簞)はキセルと讀む文字で井原西鶴の作品に二三例見出すことができます。それで井原西鶴の個人文字と言へる譯ですが、しかし文字といふのは作品に残つたものが他の人に影響を與へる可能性がある譯です。實際そこに貼込んであるのは葛飾北齋が書いた手本です。櫛とか煙管に關する本のタイトルですが、「今様櫛篋雜形」、このセツキンといふ形聲文字としての新しい使ひ方を、北齋はこの字に與へてゐます。未だに、この字を載せた辭書を私は見つけられません。どのやうな漢和字典、漢字字典にもこの字が載つてゐるのを見ま

せん。「國字の字典」に辛うじて引つかかつたくらゐです。しかし、個人文字と思はれるやうなものでも他者へ影響を與へる、しかも日本の文化史上、大きな意義を持つといふことがあるので、注意が必要だらうと思ひます。

その隣の「鱈」といふ字は室町時代に現れる字ですが、御公家さんの日記邊りに突然現れる。字源は、冬に雪が降るころにおいしくなるとか、雪のやうに眞つ白いとか書かれてゐるのですが、これは現在中國でも使はれてゐます。國字が中國へ輸出されたといふことになります。序でに言ふと日本から無理やり傳へたのではなくて、中國の方々が自分から何時の間にか使ふやうになつた。

その隣は淋巴腺とか扁桃腺とかいふ時の「腺」といふ字ですが、これは初出が判つてゐます。一番最初にこの字が出版物に現れたのは千八百五年、宇多川榛齋といふ人の本に現れてゐます。日本でいふ新造字、新しく製作した文字といふことが出來ます。今から二百六十年前に宇多川榛齋といふ蘭學者が和蘭語の *Klier* (キリル)、これは漢方醫學に無い概念で、汗が出るとか液體が湧き出す——さういふ器官、五臟六腑には無い譯で漢方醫學では必要なかつたのだけれども、蘭醫學ではこの言葉が必要だつた。最初、『幾體新書』を著した杉田玄白などは萬葉假名のやうにして「幾

里爾」と當て字をしてゐました。扁桃腺なんて云つたら「アマンデルンキリール」を漢字七文字くらゐ使つて音譯して書いてゐる譯ですが、それがたつた一文字で書けるやうになつた。この千八百五年の瞬間には、この字は個人文字であつた。ところが、これは江戸時代のうちに、ライバルが次々に蹴落して行きます。ママのやうに腺にもライバルが澤山ありました。例へば海上隨鷗、稻村三伯といふ人が、とても不思議な字(臙)を造り出してゐます。腺といふ字は泉のやうに湧き出すといふ發想で作つた字だが、こんな字では駄目だと。何だかよく解らない字になつてゐますが隨鷗といふ人によると、それはそれで考へてゐる譯ですね。これはフルヒといふ字が入つてゐる筈。この「篩」の字の異體字で、キリールといふのはフルヒの役割を果すのだといふことで、この部分を切り取つてきて、造字してゐます。肉月と合せて造つたのですが、これは読み方がはつきりしない。シといふ風に言ふ人もゐます。シと腺を較べた時、どつちが一般化するかといふことは自ら分ります。文字を一般化させるには、その字が多くの人々の理解するところになつてなければいけない筈でした。

この腺といふ字は、その後、數奇な運命を辿ります。千八百五年には現れ、十九世紀の終りには中國と韓國でも

使はれるやうになります。中國語の中でシエンといふ讀みを獲得する。汗腺とか淋巴腺とか。韓國でも十九世紀の終りには——まだ朝鮮王朝時代ですが——ソンといふ發音でこの字が使はれるやうになつた。そこで問題もなく使つてゐたやうですが、韓國では最近、日本製で、分りづらといふことになつて、使はないことになつてしまつてゐるさうです。何でも國語醇化運動と言ふのださうで、かういふ言葉を使つてゐるといふことです。最近では朝鮮語で「泉」セムといふ文字を使つてゐる。セムとは朝鮮語で「泉」を意味するのださうです。それに言換へて使つてゐる。ただ「泉」と言つてゐる時點で、日本の發想が残つてゐることが感じられるといふことも指摘できるかも知れない。

さて、もう一つ、左側のサンズイに墨(溼)といふ字は、これは贅澤な字で、隅田(川)といふ、あの川だけの爲に造られた文字でした。作つたのは石濱鷗幡といふ儒學者、つまり林述齋といふ江戸時代の儒學者が作り出したものです。これは國字でありながら、かういふ日本漢文の中にあることが出来るといふ非常に稀なケースで、實際に一字で使はれた譯ですが、江戸時代の終り頃、誰も使はなくなつた。ところが、幕末から明治にかけて成島柳北といふ人が現れて、この溼といふ字を墨田川に關して、自分の作

品の中に復活させました。更にその後、永井荷風が「溼東綺譚」といふ作品を書いて、この字にもう一回命を吹込んだ。その結果、今でもこの「溼」といふ字は「溼東綺譚」といふタイトルと共に教科書にも載るやうになつてをります。特殊な文字がある分野で共通の文字にまで格上げされ、そして一般化されるといふ、「腺」も同じですが、たつた一人の作者のものであつても社會で次第に使はれて認められて行くといふ過程が見られるものです。

最後の例ですが、「糶」とか「耗」といふ日本製の單位の中には例へばデシメートルなんかグラムといふ字を造る、さういふことも起る。これは誰が造つたのか調べてみると、明治の氣象臺が作つたものでした。今とてもさうは見えませんが、千八百九十一年に、四年間も研究した結果、ミリメートルと六文字も必要なものが凝縮して一字で書ける、といふことで決定、發表して、實際に氣象觀測の發表に使ふやうになりました。これは「位相文字」と言ふことができる。これも中國や韓國の人が眞似をするやうになりました。そして使ふやうになるのですが、やはり次第に使はれなくなりました。日本でも漢字制限の中で必要な文字といふ認定がなされた。まあ、一部で、日本文學とか書誌學とか水道屋とかだいぶ限定された中では残つ

てゐます。これらは國字のほんの一例に過ぎませんが、もつと詳しいことをお知りになりたい方は、『國字の位相と展開』（三省堂）にいろいろ書いたものがありますので、御覽頂ければと思ひます。

國字は日本人の言葉を表すための叡智の結晶であるといふ風に言へます。造られた数は恐らく千や二千といふ單位ではなかつたと思ひます。その中から社會に合つたもの、言葉にびつたり合つたものが淘汰されて現在に残つてゐる。また淘汰され過ぎたといふ嫌ひもなくはありません。最近の日本の傾向といふのは活字に關して言ふと、國字は勿論、漢字についてもイメージだけで意味や用法を無視して使つてしまふといふ風潮が強くなつてゐるといふ感じがあります。さういふものを打破する鍵は、日本人が漢字と格闘してきた跡を一人一人が意識していくしかないかと考へてをります。先人の營みの足跡を私は追ひ續けてをります。一人ではとても出来ることではないと思つてゐます。御存じのことがありましたら、是非いろいろお教へ頂きたいと思つてをります。

(ごさほら ひろゆき・早稻田大學社會科學總合學術院教授)

第八十一回國語講演會 平成十九年十一月十日 於・日本俱樂部

中學校高等學校國語の現状と問題點

佐藤 健二

ただ今ご紹介にあづかりました佐藤健二でございます。駒場東邦中學高等學校で國語科の教員をいたしてをります。現在は教頭職に就いてをりますが、週六時間中學三年生に現代文を教へてをります。この學年は中學一年生とさから續けて教へてをりますので、現在の中學國語の問題は身近な問題として理解してをります。ご存知の通り、中學の國語は國語といふただ一教科でございます。高校になりますと、高校一年では「總合國語」といふ一科目ですが、高校二年からは「現代文」と「古典」といふ二科目に分かれます。古典には古文と漢文の兩分野が含まれてをります。それを私どもの學校では、私立でございますので中學二年生から現代文と古典に分け、中學三年生からは高校と同じやうに現代文・古文・漢文といった三科目に分けて授業をしてをります。高校でも教員の専門性を考へ、古典分野を古文と漢文に分けて、それぞれ専門の教員を配置してをり

ます。現代文は一應誰もが擔當することになつてをります。

さて、本題の「中學校・高等學校の國語の現状」でございますが、ご案内の通り、中學は平成十四年度（高校は平成十五年度）から施行されました現在の「學習指導要領」により、（それは五日制對應の學習指導要領といふことです）授業時間が減らされ、教科書も當時よく報道されましたやうに、ほぼ三割削減されてしまひました。それは私が使つてをります中學校の國語の教科書にも顯著に表れてをります。各單元における選擇教材が減らされ、ほぼ一元一教材といふ形になつてしまひました。今手元に用意いたしましたのは、三省堂の教科書ですが、これなどはみごとにその路線で編集してあります。しかし、教科書會社も、學校によつては、これらの教材だけでは不十分であるといふことを知つてゐるのでせう。それまで使用されてゐた教材、あるいは發展教材は巻末の資料に收め、餘裕のある學校は、そのやうな教材も使用出来るやうになつてをります。

今日おいでの皆様の中には、三省堂の教科書は左翼的な傾向が強いのではないかとお考への方がいらつしやるかもしれませんが、特に三省堂がその傾向が強いといつたことはいけません。もしさうだとすれば、現在の國語教科書は、いはゆる平和教材の問題を含め、ほとんどすべて偏向

してゐるといふことができます。

この背景には、教科書採擇制度の問題がございます。最終的判斷の權限は各地區で首長から任命された教育委員にあるわけですが、すべての教科書について教育委員が直接讀んでその内容を判斷するといふことは、教科の多様性、教科書の數の多さから言つて不可能なことです。おのづとそれぞれの擔當教科の教員が務める調査員に委ねざるを得ないわけです。その調査員から提出された意見書に基づいて決めるわけですから、左翼的な組合が強い地域においては、その考へに近い出版社の教科書が採擇される率が高くなるといふことになつてしまふわけです。組織率が低下したとはいへ、いまだに日教組的なイデオロギーは教育界に瀰漫してをり、それが反日的世論に後押しされて、教科書採擇を左右してゐるといふのが現實です。このことは、先般の「新しい歴史教科書」採用運動に對する激しい左翼からの抵抗運動に見た通りであります。この制度を切り崩して教育委員の獨自の判斷で採擇するといふことは、教育委員によほど強い信念があるか（例へば、愛媛縣のやうに）、またその判斷を支持する首長（例へば東京の石原都知事のやうな）や世論の後押しがないと、現實問題としてはなかなか難しいのであります。特にイデオロギーの影響を受け

やすい分野は人文・社會科學系ですので、國語や社會（地歴・公民）などの分野に入り込んである左翼的なイデオロギーをいかに排除するかといふことは大變難しい問題なのであります。差し當たつて教科書採擇の上ですぐにでも對應できることは、それぞれの教科書が「學習指導要領」の求めてある「内容」や「觀點」をしつかり踏まへてあるかどうかを十分にチェックするといふことであります。

またこのことは、ほとんど言はれてゐないことですが、特に義務教育期間は國民（保護者）の義務としての教育なのですから、國民教育の觀點から正しい教科書選びができてゐるかどうかといふことです。今我が國の教育で最も缺如してゐる視點は、この「國民教育」といふことではないでせうか。「市民」といふ言葉は用ひても、「國民」といふ言葉は、學校現場ではほとんど使はれません。教育基本法では、教育の目標として「心身ともに健康な國民の育成」といふことがはつきりと謳はれてをります。この表現は、改正前の基本法でも改正後のそれでもともに同じ表現が用ひられてをります。このやうに教育基本法に明記されてゐるにもかかはらず「國民教育」は、戦後徹底的に無視されてきたのです。社會黨や日本共產黨といつた左翼政黨及び日教組を初めとする左派系の教員とそれを支持するマスコ

ミや左派系言論人によつて、國家や國民といふ言葉が封じ込められてきたのです。

では、なぜ國民教育が大切なのか。言はずもがなのことかも知れませんが、またここにお集まりの方には周知のこととは存じますが、ここが要でございますので、しばらくお付き合ひ願ひたいと存じます。

これはそもそも我が國が、明治以降西洋列強による力の外交の前に開國を餘儀なくされたといふところから出發する問題でございます。日本を力で無理やりに開國せしめたのはペリー率あるところの米國の艦隊、つまり米國の軍事力でありましたが、それ以前にオランダ、イギリス、フランスなどの西洋列強は軍事力を背景にアジアの國々を次々と植民地にしてをりました。江戸期後半しきりに日本近海に出没した米國やロシアは遅れてきた西洋列強と言へませう。お鄰の大國清までもがイギリスに蹂躪されてゐるといふ情報は、つとに我が國に入り幕府は危機感を募らせてをりました。

ペリーの率ある黒船に屈し、我が國が日米和親條約を締結したのが安政元年（西曆一八五四年）、それから十四年後の慶應四年、ここに王政復古の大號令が下されたのであります。明治元年この西曆一八六八年といふ年は、イタリ

アが統一王國になつたのが一八六一年、ドイツが統一帝國となつたのが一八七一年ですので、世界史的には我が國も西洋の後發國とほほ時を同じくして近代的な國民國家に變身したと言へるのであります。世界の近代化の流れから見れば、非白人國では日本だけが例外的に歐米と同じやうな歩みを始めたといふことができます。この近代化の流れは、文化人類學者の梅棹忠夫氏が著した「文明の生態史觀」にも分析されてあるやうに、日本の西洋模倣ではなく、まさに日本と西洋とがほぼパラレルに近代化を進め、國民國家を成立させたといふことになります。梅棹氏は、その共通基盤として封建時代（武士＝騎士）の存在を擧げてをります。

我が國においては、それまで千二百年餘り續いてゐた律令體制と七百年近く續いてゐた幕府による封建體制から天皇を中心とした立憲君主政體に改造しようといふのですから、その困難は想像を絶するものがあつたと思はれます。しかし、確かに幕末において官軍と幕府方との争亂や西南の役などのいくつかの内亂がありました。フランス革命のやうなあるいはロシア革命のやうな何十萬、何百萬もの犠牲者を出し、國王をも殺害するといふやうな野蠻な「革命」を起こす國家とは、我が國は全く異質な國家でありま

した。むしろ、王政復古といふやうに、天皇の權威にすがつて新たな國造りを始めるといつた西洋では考へられないやうな復古維新を行なつたのであります。日清・日露の大戦を経て、維新以後わづか四十年あまりで西洋列強に伍す國力を有するやうになつたといふのは、まさに奇跡としか言ひやうがありません。その奇跡を導いたのが、何といつても天皇の存在でありましたが、もう一つが江戸期の遺産の上に成立した教育制度であつたと言ふことができると思ひます。

近代國民國家ネーション・ステイトが成立するには、國家の成員たる一人一人が國民（日本人）といふ意識をもつ必要があります。我が國は神代以來自然發生的に成立した國のやうに思つてゐた時代が長かつたかもしれませんが、大陸の律令制度を導入して以來まぎれもなく制度としての國家を形成してきたのであります。ただその歴史がいささか複雑なのは、大化の改新以來強化された權威としての天皇を中心とした律令國家體制と鎌倉時代以降の軍勢力を背景とした軍事政權との二重構造になつてしまつたといふことがあります。律令下における國郡制では天長元年（西曆八二四年）に、我が國は六十六國二島と定められ、それが明治の廢藩置縣まで續いてをりました。つまり對外的には

我が國は天皇を國主とする日本といふ國でありましたが、外國と向かひ合ふことのない日々の生活においては、この六十六か國それぞれが「くに」であつたわけです。徳川時代中期以降は「藩」と稱された大名領も領民においてはそれが「くに」といふ意識となり、二八〇に近い「くに」に分かれてゐたわけでございます。京の帝の存在は、知識としては知つてゐたかもしれませんが、生活の基盤が「藩」にあつたので、「おくに」はやはり殿様を中心とした藩であつたでせう。いづれにせよ、統一國家としての日本といふ意識は、庶民の生活の中には存在してをりませんでした。

いや、庶民だけでなく、知識階級である武士でさへも、朱子學一邊倒の時代には、自國の歴史さへ學習する機會は與へられてをりませんでした。しかし律令制が形式的にでも幕末まで存続してゐたからこそ、外交問題が生じたときに敕許が必要になつたのであり、權威としての朝廷の存在は幕末まで續き、ご存知の通り大政奉還といふ形で、我が國本來の國主（統治者）は天皇であることを天下に示したのであります。なぜそのやうなことが可能であつたかといふと、やはり大政奉還の實行者徳川慶喜が水戸藩の出身だつたからといふことができるのではないでせうか。幕末の志士たちにしても、たとへばあの吉田松陰さへも、シナの歴

史には通じてゐても自國の歴史は、全く知らなかつた。水戸に留學して水戸學に接し初めて開眼し、その感激を「身、皇國に生まれて、皇國の皇國たる所以を知らず、何を以て天地に立たむ」と叫んだのであります。

水戸藩には、徳川光圀の命により始まつた『大日本史』の編集といふ大事業が、明治に至るまで營々と續いてをりました。これは朱子學の大義名分論に基づいた歴史觀により、我が國の歴史を纏めたもので、ここから生まれた水戸學といふ國體學が明治維新の原動力となつたことは、皆様周知の通りでございます。この大義名分論に立てば、我が國の君主は天皇以外にありえないのであります。徳川幕府が絶對の時代にそのやうな反權力的な大事業が可能だつたのは、水戸藩が徳川御三家の一つといふ特權的な地位が隠れ蓑になつたからにほかならないでせう。特にその事業を始めた徳川光圀の偉大さによると言へるのではないでせうか。實際幕末において誰もが讀めるやうな我が國の通史は、頼山陽の『日本外史』くらゐしかなく、勤皇の志士たちは皆懐にこの『日本外史』を入れて、倒幕運動を進めたといふことを讀んだことがございます。

長々と餘り本題と關係のないやうなことをお話ししてまゐりましたが、私が申し上げたいことは、現在のやうな日本

人といふ國民意識は決して古いものではない、この意識が日本人に共有され、日の丸・君が代のもとに統一されていくのは、明治以降の教育制度に俟たなければならなかつたといふことであります。我が國の國體は西洋と違つて神代

以來一貫した長い歴史、それは萬世一系の天皇の存在に支へられてをり、『日本書紀』を代表とする史書がそれを明かしてをります。また『萬葉集』以來の文學（とくに和歌の歴史）を有してをり、その古典の學習だけでも多くの時間を必要とするわけですが、さらに異質な西洋の法體系に基づいて近代國家を形成したために、常に教育によつて國家の歴史あるいは皇室と國民との關係について勉強し続ける必要があります。少なくとも義務教育期間においては、國語・國史を中心に國民教育をしっかりとっておかないと、この日本といふ國がいかなる國であるか、他國と比して、何が異なり、何が優れてをり、何が不足してをるかといつたことについて理解しないままに、一生を終へてしまふことになるのであります。國民としての一體感を喪失した國は、内部的に崩壊していきます。内部解體する危険性をもつてゐるのです。内部解體といふのは、國家の柱石たる皇室と國民とが離反すること、たとひ國民が存在してゐてもてんでばらばら、國家の危機が迫らうとも他人事

のやうに我關せずといつた態度しか取れないやうな状態を言ふのであります。既にそのやうな兆候が隨所に現れてきてゐるといふことは、本日ここにお集まりの皆様にはつとにお氣づきのことかと思はれます。

ある新聞社、あるいはある出版社、あるいはそれに洗腦された言論人が、さかんに「地球市民」といつた言葉を使つて、情報や物の流通がボーダレスに行はれてゐる現代においては國家といふ存在はもはや過去の遺物であり、むしろ自由な流通を妨げる反時代的な存在であるといつた宣傳をしてをります。しかし、「地球市民」といつた概念は、あれは明らかに革命思想の變形であります。かつての立ち上られ、萬國の勞働者よ、世界の勞働者階級の連帯といつた國境なき世界の幻想が、またぞろ登場したわけでありまして、ソ連やシナ革命の實態が何千萬といふ罪なき勞働者を死に追ひやつた非人道的な權力闘争に過ぎなかつたといふことは、最近の研究でかなりはつきりしてきてゐるのであります。ソ連の崩壊、その後次々に明らかになつてきてゐる舊ソ連や中國共產黨の歴史などを見ますと、「地球市民」などと寝ぼけたことを言つてゐるのは、我が國の反日的マスコミ、言論人くらゐでありまして、中國共產黨はもちろんのこと、最近のロシアにしてもしかり、アメリカは

言ふまでもありませんが、中東諸國にしても、みな強力な國家權力により國民を誘導し、世界における自國の存在感（プレゼンス）を高めるために必死になつてゐるのであります。これはいい悪いの問題ではなく現實にさうだといふことであります。資源やエネルギーや食糧といった我々の存在の根本を保障してゐるのは、國家であります。國家にその力がなかつたら、いかに個人で頑張つたところでなんの力にもならない、我々の生殺與奪の權が他國に握られ、屬國化してしまふのです。我が國が資源小國であることは言ふまでもありませんが、それゆゑに國民の優れた資質と科學・技術力で、この豊かさを堅持してゆかねばならない。

私の勤務してをります駒場東邦の初代校長菊地龍道は、「頭腦の資源化」といふことを學校設立の一つの理念と致しました。資源のない我が國では、國民一人一人の優れた頭腦をもつて資源の不足に換へ、國力を増強し、豊かな生活を創り出していかうといふことであります。これは中國、インドといった人口大國が經濟力をつけつつある今日においては、國家最優先の課題といつてよいのではないかと思ひます。そのとき力になるのは、國家を形成する國民の國に對する意識であります。國家が繁榮してこそ、我々の生活が平和でかつ豊かなのだといふ信念がなければ、嚴しい國

際競争（國家間闘争）に打ち勝つことができせん。外交の前線にゐるのは政治家や外交官であります、かれらの行動の後押しをするのは、國民多數の意識であるのです。それなくして、政治家や外交官は國家を背負つて戦ふことはできません。

戦後一貫して敗戦國民として自己主張することを封じられ、パラサイトの（寄生蟲的）な生き方を強ひられてきた日本は、占領が終はり國家として獨立を回復した後にも、パラサイトのな依存體質が腦髓を侵して、獨り立ちできない状態になつてゐます。今では、そのやうな意識を作つた當の本人がもういいだらう、そこまで卑屈になることはないだらう、もう普通の國になりなさいとエールを送つても、いやいや結構です、このままでゐさせて下さい、私たちはいざといふとき何をしでかすかわからない信用のおけない人間なのですからといつて獨り立ちすることから逃げ回つてゐるありさまです。このやうな精神狀況で、既に始まつてゐる世界大競争時代に勝ち抜いていけるでせうか。とてもそのやうには思へません。我々が教育の中でしつかりと意識付けなければならぬことは、我々はいやでも應でも日本人としてしかこの世界では生きて行けないといふことであり、（それがいやなら國籍を移せばよいのですが、

反日的な人たちは、反日を叫ぶ割には日本が好きやうで、出て行きません。彼らこそ反日を商賣とする日本パラサイト（寄生蟲）で、この國がなければ何も出来ないのです。日本人として存在するといふことがどのやうな意味を持つかといふことを、國語や歴史などを通してしつかり教へていく必要があるのです。

ここに一冊の教科書があります。これは『現代國語讀本』といふ戦前の中學國語の教科書で、卷一から卷十までの十冊ございます。初版は大正十二年に出されてをります。戦前の中學校はご承知の通り五年制でしたので、確かめたわけではございませんが、恐らくこの冊子は一學年で二冊使用して、五年で合計十冊使用するといふことだつたと思はれます。この本は、昭和十年發行のもので、修正七版と記されてをりますので、當時かなり使用された國語の教科書ではなかつたでせうか。著者は八波則吉やつなりのきちといふ方で、この方は戦前の大變優れた教科書編輯者であつたと伺ひました。出版社は株式會社東京開成館となつてをります。

戦前の國語科は、國漢と稱して、國語と漢文との二科目に分かれてゐたといふことでございますが、この教科書は『現代國語讀本』といふ標題になつてをり、國語の教科書であります。内容は現代文と古文、それに若干の漢文入門

教材も入つてをります。現在と全く違ふ點は、この本は八波先生單獨編集といふことで、現在のやうに複数の教員が集まつて編集してゐるのではありません。それゆゑに編集方針が非常に明快であります。ここに收められてゐるすべての文章を通して國語の美しさといふ國の素晴らしさ、ことにその歴史と人々の生き方を傳へたいといふこと、またそれらを通して日本人としての豊かな情操を育てたいといふ思ひが非常によく傳はつてまゐります。

全部で三十七編收められてをりますが、作者は實に多士濟々、少し長くなりますが、次にその作品と作者の名前を擧げてみませう。

- | | | |
|--------------|--------|------|
| 1. 春 | 相馬 御風 | 〈常體〉 |
| 2. 若き生命 | 三木 露風 | 〈文語〉 |
| 3. 春の田舎の楽しみを | 五十嵐 力 | 〈敬體〉 |
| 4. 四季小品 | 徳富 健次郎 | 〈文語〉 |
| 5. 松下の盟 | 添田 壽一 | 〈常體〉 |
| 6. 恩師へ（書簡文） | 編者 | 〈敬體〉 |
| 7. 同窓會（詩） | | 〈文語〉 |
| 8. 菖蒲の節句 | 島崎 藤村 | 〈常體〉 |
| 9. 堪忍の二字 | 柳澤 淇園 | 〈文語〉 |
| 10. 漢字の話 | | 〈常體〉 |

漢字の歴史・部首・字音・字訓

11. オリンピック

山川 建 (常體)

28. 近く秋 (詩)

野口 雨情 (文語)

12. 我輩は猫である

夏目 漱石 (常體) 8頁

29. 波に咲く花

吉江 喬松 (敬體) 9頁

13. 犬好きは犬が知る

二葉亭 四迷 (常體) 9頁

30. 水の都

大類 伸 (常體)

14. 辨當

加藤 武雄 (常體)

31. 汝の母

姉崎 嘲風 (敬體) 9頁

15. 五月の朝 (詩)

千家 元麿 (常體)

32. 少年ノ意氣

〔漢文訓讀體・漢字片假名交じり〕
徳川光圀・伊達政宗・本田忠勝・毛利元就・
徳川頼宣の少年時代

16. 漢文の話

〔常體〕
漢文の歴史・訓讀法

33. 菊の馨

石井 國次 (敬體)

17. 大日本帝國

〔漢文訓讀體・漢字片假名交じり〕
參考に原漢文を付す

34. 明治天皇の御遺物

笠井 信一 (敬體) 8頁

18. 使臣の面目

編者 (常體)

35. 柿二つ

高濱 虚子 (常體) 9頁

19. 人間の大小

薄田 泣菫 (常體)

36. 柿を送られし禮狀 (書簡文)

正岡 子規

20. 青年に寄す (詩)

百田 宗治 (常體)

37. 宇治河ノ先登

頼 山陽 (漢文訓讀體・
漢字片假名交じり) (日本外史)

21. 夏休

幸田 露伴 (文語)

22. 棟の木

吉村 冬彦 (常體)

23. 二十年前の私

吉田 弦二郎 (常體)

24. 立志

〔漢文訓讀體・漢字片假名交じり〕
參考に原漢文を付す

25. 道灌の文事

湯淺 常山 (文語)

26. 息軒先生

森 鷗外 (常體)

27. 惜陰

〔漢文訓讀體・漢字片假名交じり〕

これで半分ですから、當時の中學一年生が、いかに數多くの文章に接してゐたかが改めてよくわかります。『現代國語讀本』とあるので、現代文が多いのは當然ですが、それが常體つまり「だ。である」體だけではなく、敬體つまり「です。ます」體も取りまぜ、また文語文や漢文の初歩

參考に原漢文を付す

も含めながら、多様な國文の世界を同一平面上に展開して
 ませてゐます。これだけの作品数ですから、一作品の分量
 はさほど多くなく、上に示したやうに、せいぜい九頁程度
 です。はたして當時これらの文章をすべて授業で扱つたか
 どうかわかりませんが、現在の中學一年生用の國語教科書
 と比較しても、その作品数において格段の開きがあること
 は否定できない事實であります。

ちなみに、現在の中一用教科書、今手元にあるのは三省
 堂の『現代の國語』といふものですが、その目次を以下
 に紹介いたします。通し番號は、こちらで付したものです。

1. 朝のリレー (詩) 谷川 俊太郎
2. 竜 (物語) 今江 祥智よしとも
3. 「自分新聞」をつくろう (書く)
4. クジラの飲み水 (説明文) 大隈 清治
5. 「討論ゲーム」をしよう (話す・聞く)
6. アイスキャンデー売り (隨筆) 立原 えりか
7. (表現プラザ1) せりふとト書き (書く)
8. 食感のオノマトベ (報告文) 早川 文代
9. レポートを書こう (書く)
10. わたしたちと古典 かぐや姫の物語 (古文)
11. 矛盾 故事成語 (漢文)

12. スピーチをしよう (話す・聞く)

13. 空中ブランコ乗りのキキ (物語) 別役 実

14. ユニバーサルな心を目指して (論説) 三宮 麻由子

15. 体験文を書こう (書く)

16. ウソ (詩) 川崎 洋

17. トロッコ (小説) 芥川 龍之介

18. (表現プラザ2) 話をつなぐ (話す・聞く)

19. (ワークシヨップ) 学校案内パンフレットをつくろう

20. (文法のひろば) ①ことばのまとまり

②文の組み立て ③単語のいろいろ ④名詞

21. 漢字のひろば ①字体・画数・筆順 ②部首

③漢字の成り立ち ④音と訓

御覧になつてのご感想はいかがでせうか。なんと可愛ら
 しい物語や文章で構成されてゐることか。戦前の教科書の
 重厚感とは雲泥の差がございます。しかも文章教材は、詩
 を加へてもわづか十一編しかございません。戦前の三分の
 一以下です。國語力の基本は、まづ多くの文章に接し、多
 様な表現、豊富な語彙を身につけることにありますので、
 國語教育といふことでは、非常に貧弱な状況になつてゐる
 といふことができます。またそこで取り上げられた文章で

すが、はたしてこれらの文章を読んで、我が國の歴史や文化にどこまで觸れることができるか。今江祥智の「竜」といふ物語は、我が國古來の龍神信仰を背景にしたなかなか面白い作品ですが、これも我が國のそのやうな古い傳承世界を知らせるといふよりも、三太郎といふ子供の龍の心の成長を中心に讀解させますので、この作品を通して自國への理解が深まるといつたものではありません。唯一戦前の作品として芥川の「トロツコ」といふ作品が取り上げられてをりますが、これも少年の移り變はる心理の讀解が主となり、日本の文化や傳統に關心を持たせることにはなりません。中學校の學習指導要領國語の中で、教材を取り上げる上での配慮として、「我が國の文化と傳統に對する關心や理解を深め、それらを尊重する態度を育てるのに役立つこと。」といふ一項がありますが、はたしてこのやうな教材で、どれだけの教員がこのことを意識して授業が展開できるかはなほだ疑問であります。

もつとも、このやうな比較に對して、戦前の中學生は難しい選抜を経て選ばれた秀才たちであり、現在の義務教育としての中學生と比較するのはそもそも無理があるといふご批判もあるかと思ひます。確かに戦前の中學生のエリート度は、進學率五〇パーセントを超えた現在の大學生より

もはるかに高いものであり、歴史的多數が高等小學校止まりであつたことを考へると、この資料だけで精緻な議論などできるはずがございませんが、ただやはり敗戦後遺症と申しますか、戦後の墨塗りにより日本の偉人の話や榮光の歴史や優れた傳統を紹介する文章が抹消されたといふ心の傷がいまだに残つてゐるのか、そのやうな文章が極めて少ないことははつきりと言へることだと思ひます。

また、このことは教員の意識をも拘束してをり、ビジネスの世界では恐らく先ほど申しましたやうに、國力が背景にないと大きな仕事はできませんので、大企業に勤めるビジネスマンはみな國家の威信といふことをよく理解してゐるのですが、教員の意識は極めて閉鎖的で、特に左翼的傾向の強い教員は國家について語ることを忌避するのであります。つまり健全なナシヨナリズムが自らの中に育つてゐないので、國家について冷靜に語ることが出來ず、いざ語るとなると最初から思考停止状態で、まるで惡魔について語るかのやうに興奮し、聲高になつてしまふのです。私は大多數の日本人はみなこの國のことが好きだと思つてゐます。ですから日本中が反國家的になるなどといふことはあり得ないとは思つてをりますが、教育の場を通して健全なナシヨナリズムを養成されてゐないと、いざといふときに

激情にかられ、國を守るといふ大義のもとに、國家を危機に陥れるやうなことがあるかもしれません。つまり國難に際して、舉國一致して敵に對することができなくなるのではないかといふことを恐れるのであります。

高校の教科書は、當然中學より古典教材が増え、文章も高度なものになります。それにより國民的自覺を高めるやうな教材が増えるかといふとそのやうなことはございません。資料をご覧になつて頂ければおわかりになるかと思ひますが、中學の教科書と違つて採られてゐる執筆者も當代一流の作家や評論家や學者でありますし、なかなか読み應へのあるものが多く採られてをります。しかし多くは極めて普遍的なテーマであり、我が國固有の問題を考へさせる、あるいは氣づかせる文章は、決して多くはありません。確かに、現在の情報化と言はれる時代においては、年齢に關係なく誰もが同じ情報を自由に自分のものにする事ができます。戦前と比べ物にならない廣大な情報世界が構築されてをります。興味、關心さへあれば、知識だけなら教師を凌駕するほどの知識を習得することは可能です。さらに映像メディアが、これまで膨大な世界を作り出してをり、現在若者たちは、テレビ、映畫、ビデオは言ふに及ばず、パソコンや携帯電話のネットを通して膨大な映像メディア

と日々接してをります。所謂活字離れが急速に進んでゐるわけですが、このやうな状況の中で、今盛んに言はれてゐるのが、コミュニケーション能力であり、情報発信能力といふことです。いかにして自分の考へや思ひを正確に他者に傳へることが出来るか、相手の考へを正しく理解し、相互に意見の交流を圖るにはどのやうな言語能力が必要か。このやうな對面的な人間味溢れた意思疎通を可能にするには、まづは己が一個の自立した存在であることが必要條件だと思はれます。しかし、一個の自立した存在になるには、その立脚點が確保されてゐなければならず、その立脚點こそ、その人の精神を形成してゐる感性や世界觀であります。それは母國語により形成されるものです。國語を通して歴史や傳統も身に付くのであり、そのためにも美しい日本語を多く與へる必要があります。それをしつかり自覺的に身につけてはじめて、外國に行つても氣後れしたり、卑屈になることなく、おほらかな氣持ちで堂々と心を通はせることができるやうになると思ひます。我々教育者の使命は、そのやうな立脚點を明確に言語化して、子供たちに與へることではないでせうか。そのやうな觀點から言ふと、現在の中學・高校の國語には、もつと日本人であることを自覺させるやうな文章が必要であり、それも格調の高い、時代

を超えて評價されてゐるやうな文章を多く取り上げてもらひたいと思ひます。また教科書の問題と併せて、それを教へる教師の意識が問題です。現行の教職課程の指導では、今回述べたやうな國民教育の理念については觸れられることがなく、また日本人としての自覺や國民性について考へる契機は與へられてをりません。この教職教育の在り方についても、關係各位において、今後検討を加へて頂きたいと思つてをります。

ご清聴有難うございました。

(さとうけんじ・駒場東邦中學高等學校教頭)

追悼宇野精一先生

宇野精一先生を偲ぶ

小田村四郎

宇野精一先生の御逝去は、單に國漢學會のみならず、日本國家にとつて掛替のない損失であつた。

私が初めて先生にお目に掛れたのは、大藏省在勤中の昭和三十九年のことで、文部科學技術擔當の主計官として四十年年度豫算要求の査定に當つてゐた時であつた。この年、異色の豫算要求として文部省國立國語研究所（當時の所長は岩淵悅太郎氏、副所長は林大氏で、同氏は私を補佐してくれた宮下創平主査―後の厚生大臣、防衛廳長官―が名古屋陸軍幼年學校生徒だつた時の教官であつた）の電子計算機導入があつた。當時の電算機は主として統計事務に使用されてゐたから、從來専ら事務經費の積算のみであつた國研の豫算に、電算機は聊か異質であつた。要求の趣旨は、常用漢字選定に際し抽象論のみを聞はしても成果は舉らない、この際國研としては市販の雜誌を手掛りに國民が使用する語彙を統計的に調査し、そこで用ゐられる漢字の頻度

を調べたい、といふことであつた。

常用漢字制度自體、速かに廢止さるべきものであるが、存在する以上は改善が必要である。然しその基準を使用頻度に求めるのは聊か安易に過ぎないか。電算機が高額であることと併せて私は判断に迷つた。そこで専門家の有識者の御意見を徵したいと思ひ、思ひ切つて東大に電話して國語審議會で御活躍中の宇野先生に御足勞を煩はせることにした。先生は眞剣に問題をお聴き下さつた後、結論としてこの計劃には賛成である、常用漢字の缺陷を指摘する場合、實例を示すことが効果的であるが、豊富な語彙が電算機により檢證されることは大變結構だと思ふ、との御意見であつた。私は、先生の御意見に支へられてこの問題を決斷することが出来、また要求を認められた関係者の方々には大變喜ばれる結果となつた。（その後、宇野先生はじめ諸先生の御奮闘により、國語審議會で中村梅吉文相により「國語は漢字假名混り文とする」ことが公認され、昭和五十六年に常用漢字廢止、常用漢字制定となつたことは周知の通りである。）

先生は本協議會結成以來、幹部として御活躍になり、平成五年木内會長御逝去に伴ひ、會長に就任された。木内氏が手がけてをられた諸事業の整理に伴ひ本會の事務所も移

轉することとなり、幸ひ事務局長新井寛氏が目白の別宅を提供して下さつたので、毎月の理事會はそこで行ふこととなつた。宇野會長は御老體にも拘らず毎回御出席下さつた。

目白時代の本會の事業として「平成新選百人一首」の刊行がある。これは本書「あとがき」にあるやうに、石井公一郎理事が構想し、推進したものである。現在の小倉百人一首は歴史も古く日本の情緒に充ちたすぐれた名歌であるが、何としても時代的、内容的に制約があるので、この機會に記紀萬葉以後現代に至るまでの名歌のうちから新たに百首を精選して次代の國民に傳へたい、といふ目的であつた。しかしその選定ができる人は當代隨一の碩學でなければならぬ。その意味で宇野先生が本會の會長であり、まだ御健在である今こそ、これを實行する最後の機會である、といふことが石井氏の眞意であつた。

幸ひに幹事の新井寛氏、萩野貞樹氏はじめ本會の同人達、さらに部外の廣瀬誠氏などの御協力を得て、「平成新選百人一首」が完成した。この間、先生は選定作業には殆ど御出席され、また御出席できない場合には指示を與へられた。従つて、この企畫が無事に完成できたことは、偏に宇野先生のお力に依るものと言つても決して過言ではない。

國語問題や御専門の漢學以外でも先生の御活躍は多方面

に涉つてゐる。村尾次郎先生の「東京教育懇話會」にも毎回御出席になり活潑な御意見を開陳されてゐる（例へば小學校の英語教育など、御自分の高師附小時代の御經驗に徴しても全く時間と金の浪費であると痛論されてゐる）。また家永三郎氏の歴史教科書檢定をめぐる裁判では、マスコミ、左翼の包圍攻撃に對し、先頭に立つて文部省を支持、擁護された。國家機密に關するスパイ防止法の整備は國家として當然の責務であるに拘らず、左翼、リベラル勢力の抵抗に遇つて未だに制定に至つてゐないが、先生はこの運動でも代表として戰つて下さつた。

このやうにして在りし日の先生をお偲びするとき、先生が當代屈指の大學者であつたのみならず、祖國再建の國士としての生涯を貫かれたとの感を強く覺えずには居られない。

(をだむらしらう・本會會長)

宇野先生と國語審議會

林 巨樹

不用意にも「先生は大正一卜桁とは、存じますが、おい

くつにお成りですか」とおたづねしたら、「バカ言つちやいけない、わたしは明治ですよ」と、窘められた。窘める、とは、それはいけないことだと注意を與へる、穩やかにしかるの意味だと、あらためて悟つた。窘めるとは勿論和訓語だが、字音はクンかキンか、先生にうかがつてみようとと思ふうち、先生が世を辭してしまはれた。晩年、おみ足が御不自由になつてをられたけれども、その聲音の朗かさ明瞭さから、白壽も近からうと存じ上げてゐたのであつた。

「國語審議會の委員として漢字の制限に反對」（朝日新聞）、「國語審議會委員として制限漢字の撤廢を出張」（讀賣新聞）とは、先生の訃報の一部である。國語審議會委員として先生の名が登場するのは、同委員會の第五期（昭和三十四年三月——昭和三十六年三月）であつて、先生はまだ東京大學教授であつた。第七期（昭和三十九年一月——昭和四十一年一月）にも、宇野精一（東京大學教授）とみ

える。まだ先生は東京大學定年以前のことであつたらう。第十一期（昭和四十七年十一月月——昭和四十九年十一月）には、宇野精一（二松學舍大學教授）とあり、第十二期（昭和五十年一月——昭和五十二年一月）には東京大學名譽教授となり、第十三期、第十四期（昭和五十二年四月——昭和五十六年五月）に及んだ。

國語審議會の第十一期（昭和四十七年十一月——昭和四十九年）には宇野精一先生、木内信胤先生が委員としてご在籍のところへ、林も入れて下さつた。林はそれから第十二期、第十三期、第十四期、少しとんで第十七期、第十八期、第十九期、第二十期とずゐぶん長く勤めた。埒もないことである。

（はやしおほき・青山學院大學名譽教授、本會副會長）

宇野精一先生の思ひ出

石川 忠久

宇野先生と言へば、際立つた二つの面を思ふ。

一つは、所謂「肥後もつこす」の面。戦後の國語政策や、其れに乗じて跳梁跋扈した連中に對し、正論を堂々と開陳、一步も譲らず、終には國語審議會を脱退するに到る。其の地位に在り、其の衝に當り乍ら、定見無く、何もしない識者が多かつただけに、先生の言行は一貫して力強く、際立つた。

毛澤東の中國が大嫌ひなのも徹底してゐた。「中國」といふのも厭で「支那」を通された。自由に旅行が出来るやうになつても、中國へは絶対に行かうとされなかつた。

もう一つは、東京山の手の坊ちゃんのの面。哲人先生が東京に新たに創められた「學者の家」の御曹司として、明治末、大正、昭和初期の古き良き時代に伸び伸びと育ち、大らかに生きられた所以だらう。第一に、邊幅を飾らない。體裁ぶらず、在りの儘。其れは我々若輩に對して分け隔て無く接する事にも表れる。

何と言つても楽しい思ひ出は、烏鷲（圍棋）の遊であらう。東大の中哲文の研究室の棋好きが學士會館などに集つて、屢々烏鷲を戦はせた。中でも「竹陰會」と稱する會は、先生を頭に六人、年四回開催、昇降級規定を設け、優勝盃まで作つて、三十年の長きに及んだ。地方での學會には攜帶棋盤で往復没頭し、學會終了後はあちこちの温泉宿などに泊り地方巡業をしたものだ。

先生の二十代は御病氣がちだつたが、戦後はお元氣を取戻され、私の學生の頃（昭和二十年代後半）は、髪黒く、背高く、齒切れの良い山の言葉で、豁達なご様子であつた。加藤常賢先生の老教授の風貌に比して、いかにも若い印象を受けたものだ。

山の言葉と言へば、御母堂が生粹の東京人で、文字通りマザー・タンクの影響を受けられたとか。言語學者の服部四郎博士の折紙付き、がご自慢だつた。

私は中國文學科へ進んだが、中國哲學の講筵にも多く列つた。當時、中哲の學生は極めて少く、先生と一對といふ講義もあつたほどである。其の後は、大學漢文教育研究會（後に全國漢文教育學會と改稱）や、湯島聖堂斯文會の先生の後を承つて、會長、理事長を勤め今日に及んでゐる。思へば、半世紀を超える長い間、先生に最も親炙したのは

私であらう。

今年、先生には明けて九十九歳を迎えられた。實は一昨年頃より、白壽のお祝を、と相談をしてゐたのだが、一月七日に長逝され、其れは叶はなかつた。哲人先生に續き、父子二代の白壽は、世にも稀なる慶事となる所だつただけに、洵に残念であつた。

亡くなる一と月前、私は初臺の病院へお見舞に伺つた。お休みの中だつたが、丁度お目覺めになり、お誕生日（十二月五日）の祝意を述べたのを、ご嘉納になつた。お顔には艶があり、頬紅く、恰も神仙の如きお姿であつた。

（いしかはただひさ・斯文會理事長、本會評議員）

宇野先生の思ひ出

田中 佩刀

舊制の大學二年生であつた昭和二十三年四月に初めて宇野精一先生の講義に出席した。今年（平成二十年）は昭和八十三年で、もう六十年も前のことになるので記憶も定かでないから、一般の講義だつたのか、講讀だつたのか、どうも思ひ出せないが、教室ではなく研究室で受講したやうに思ふ。受講生は十人足らずであつた。テキストは孫詒讓の「墨子閒話」で、當時は中々本が手に入らない世の中であつたが、偶々私が謄寫版を持つてゐたので、毎回、宇野先生が指定された部分を私がガリ切り（印刷）して、資料を受講生たちに配つた。

そんな事から宇野先生に目をかけて頂くやうになり、翌年には「春秋左氏傳」のガリ切りをしたやうな氣もするが、確かではない。

昭和二十九年から私は大學の教壇に立つやうになつたが、宇野先生は私に東京支那學會と斯文會とに入會するやうに勧めて下さつた。大學の仕事がいそがしくなつて、滅

多にお會ひする機會も無くなつてしまつたが、私が發表した論稿には目を通して下さつて、批評の御便りを頂いたりもした。

平成四年頃であつたか、宇野先生が私を大倉精神文化研究所の儒教研究室主任に御推薦下さつて、三年ほど大倉山（横濱市）に通つたことも有つた。

平成十三年であつたと思ふが、或る日、突然に國語問題協議會の新井寛理事から御電話が有つて、非常勤理事を引き受けて欲しいとのことで、非常勤ならばと承諾した。後になつて會長は宇野先生であることを知り、何だか嬉しくなつた。

そして新井理事から講演を依頼されて、當日の會場に行くこと、宇野先生も會場にいらつしやつた。

講演の休み時間に、宇野先生と私は、ゆつくりと御話できた。

高校時代の私のクラス擔任は市川安司先生であつたが、宇野先生と市川先生とが大學の同級生であつたことは、大學卒業後に知つたことであつた。

市川先生の思ひ出話や、大學で書誌學の講義を受けた長澤規矩也先生の思ひ出話などをお話した。宇野先生も、長澤先生に呼ばれて講演會に参加されたが、テキストは前人

未讀の漢籍ばかりで苦勞なかつたことなど、愉快さうに御話なかつた。

その後も、斯文會などで時折り御目にかかる機會が有つたが、御挨拶程度で、國語問題協議會の講演會の休憩時間の時ほどには、ゆつくり御話することは無かつた。

いつも温かく私に接して下さつた宇野先生でいらつしやつたが、昭和四十年前後の學園紛争の時は、敢然と學生集團と討論なかつたといふ強さも御持ちの先生でいらつしやつたと聞いてゐる。

御長壽でいらつしやつたとは言へ、まだまだ先生の御指導を仰ぎたかつた。本當に残念なことであつた。

末筆ながら、謹んで先生の御冥福を御祈りする次第である。

（たなかはかし・明治大學名譽教授、本會理事）

論語竝に孟子講座の十一年

駒井 鐵平

齡六十の半ばが過ぎた昨今、これ迄の讀書曆を回顧してみる。論語は必要に應じて何度か眼を通した事がある。教職に在つた頃、毎年の世界史の授業に於て、孔子の生涯や論語の内容に就て掻い摘んで説明するのが常であつた。初めは、當然乍ら書物からの知見に本づいて話をしてゐたが、三十年程の昔、本駒込の三百人劇場に於て、宇野精一先生の論語の講筵に列して以來は、其の簡にして要を得た解説を頭に入れて話すやうになつた。

爾來二十年、夢にも思はなかつた、恰も舊幕の漢學塾の如き場に於て、宇野先生の論語講讀を直接に受ける機會が到來したのである。

孔子は弟子によつて教へ方が違ふ。同一の弟子であつても、時と場合とによつて違ふ。子貢は最も優れた弟子である。顔回は人格が宜しい。顔回は孔子の縁續きである。孔子の母の名は顔徴在といふ。女性の名が傳はるのは珍しい。宰我は論語には何度も登場するが、いつも孔子に叱られて

ゐる。

右は何れも宇野先生に教へて戴いたのである。今を去る十四年前、平成六年十一月に目白學藝院の教養講座の一環として、宇野精一先生の論語講讀が始まつた。當時、職務その他の都合で初めの何回かは受講が叶はなかつた。翌年平成七年三月十二日の講讀が第一回の受講である。會場の目白ローゼ・ハイムの一室は、當時國語問題協議會の事務局の部屋でもあつた。

講讀は月に二度、日曜日の午後二時から三時半迄である。社會人が對象の講座である。月に一度でなく二度に定めると、どちらか一度は出席の都合がつくであらう、といふのが事務局長の新井寛氏の説明であつた。教本は斯文會訓點論語である。受講者は十名を越える場合も何度かはあつたが、大抵は數名の者が宇野先生を御圍みして耳を傾けるのであつた。先生には當時、齡八十の半ばを超えて御出でであつた。其の老先生が、開始になると姿勢を正して、張のある御聲で論語の一節一節を丁寧と読んで下さるのである。語法は漢學の傳統に本づいて、孔子の場合は「いはく」ではなく「のたまはく」なのであつた。

が、御高齡の先生には御病床の日々を免れる事は難しかつたのである。論語も亦、中斷になる。が、受講者の誰一

人として、次の再開の日を疑ふ者はみなかつたのである。我々だけの受講といふのは洵に勿體無い、といふのが、知り合つた者同士の話の常であつた。

孔子の弟子では子路が一番御好きらしかつた。解説の話題は人物から當時の風習へ、そしてそれは他との比較へと進む。孔子の時代の宮廷の宴會では、詩經の文句を使つて挨拶をする。古代ギリシアではホメロスの詩を吟じ、我が國では自ら歌を作るのであつた。

若い頃、教育敕語を讀んで明治天皇は開明天子の筈であるが、といふ感じがしたが、年を取るにつれ仰せの通りであると思ふやうに仰しやる。論語の「直」といふ字には色々な意味があり、それを調べる積りでゐて、最早無理である、といふ述懐も伺つた。

平成八年十月二十七日には、論語講座の一環として、大塚先儒墓所での先儒祭に、先生の御伴をして受講者一同が參列したのであつた。論語全卷讀了の最終講讀は平成十三年十月十四日であつた。受講者は十二名である。續いて、受講者一同の無理な願ひを聞いて下さつて、孟子講座が平成十四年三月十日から始まつた。教本は簡野道明補註の孟子集註である。平成十七年十一月二十七日、これ以上は無理であるとの先生の御意嚮に隨つて、孟子講座が終了した。

受講者は八名、先生には御歳九十の半ばの頃であつた。翌年平成十八年十二月を以て三百人劇場が閉館になつた。正しく世の無常である。

(こまゐてつべい・元千葉縣立高校教諭、本會評議員)

情

—時の韻—殷殷凜乎

安東 路翠

それは平成十三年のことであつた。

宇野精一先生と白河の關を訪れた時のことである。

常磐線の車中、遠近の風景の流れの中、『論語』の話になり、十二律のご説明をいただいた。

孔子の「樂」は春秋當時、最も禮に適ひ完成されていたのであつた。

「懸而樂」とあり、銅鐘の形態から當時の權力者の持つ編鐘始め馨等の石聲を含め韻律の本格的な樂の壮大さを何か満ち足りた思ひで語り、その後、石川忠久先生にお連れいただいた曹侯乙墓より發掘の驚嘆すべき編鐘の事などにも言及し時の經つのも忘れる程であつた。

「侃侃樂と言ひましたからね、楽しんでたのですよ。」

「孔子は、子路に琴を弾じさせ歌はれましたが、先生は樂は如何ですか。」

と、問ふと

「ハハハ」

それから暫くして、思ひがけず都都逸風に「こんな歌はどうですか。(七十八は涙垂れ小僧)九十を迎へたいま(男盛りと人の言ふ)自分が言つたのではなく人が言つたのですよ。ハハハ」

和やかな車中の風景であつた。

又、漢墓の甌の魅力にも話が及び、その甌の中でも大鳥が民家の庭で舞ふ姿があり懐かしく忘れ得ないと言ふ話題で賑はつた。

すると先生がいつもの静かな聲で

「齋代の逸話にかういふのもありますよ。『禮記』にありますのは、美しい鳥が羽を揮はせて雨が降りさうだと豫告する、振訊と言ひましたが、宮殿の前庭で一本足の鳥が、それを商羊と言ふのですが、翼を廣げて鼓舞するそんな話がありますよ。」

「そんな故事にもとづいた圖はかりなのですな。」

漢代の墓室に残されてゐる驚くべき貴重な畫像、その人の知識と感覺の表現を受け止め、明瞭に説かれる現代の學者、その間の今に繋がる時空のあまりの近さと遠い記録の記憶が、津々と鎖まつて行く様に思へて胸を打たれた。

東北の「關」の空氣が限り無く澄んで行く様に思へた。

平成十五年六月二十九日、『平成新選百人一首』の出版

記念講演會に赴かれる宇野先生に隨伴、京都を訪れた。

青葉のあふれる國際文化會館で盛會の内に講演を終へ、翌、六月三十日、堀内保丸先生に京都を御案内いただいた。

葵祭りの巡りの順に做ひ、下鴨神社、上賀茂神社、松尾神社、車折神社を御參拜した。

上賀茂神社では當時の建内光儀宮司様より數々の御心づくしを頂き、夏越の祓の神の領域で古都の歴史と風情を存分に味はせていただいたのであつた。

— 京都記念講演の後に —

よみひと安東路翠

下鴨神社にて（朱の麗美なる御門前に）

賀茂御祖の鳥居をくぐり語らるる綠陰深き神のみあらか

上賀茂神社にて夏越の節供

仁象を清水に流し下賀茂の杜に夏越の歌會盛る

松尾神社にて（御一緒に茅の輪をくぐりて）

まうで來し奥の殿には休まずに光湧きたり無き韻も有り

車折神社にて

早朝の粥を食み來て質實を言はれし神庭説しからまし

今、思ひでと言ふにはあまりにも貴重な時をおもふ。

歌も、書も、その他あそびも一瞬に目をお通し下さり、

旅の折りにも御指導に徹せられた先生の明晰な御聲が、殷殷と凜とした御姿勢と共に漢籍の間に響き、大寒を厳しくしてゐる。（平成二十年一月記）

（あんどろすい・日本畫家、本會評議員）

八重の潮路

松岡 隆範

宇野精一先生は明治四十三年（千九百十年）のお生まれで平成二十年に亡くなられたので享年九十九、白壽ハクジュウであらせられた。

平成八年十一月の國語問題講演會で島崎藤村の詩「椰子の實」について次のやうな事をおつしやつた。

「椰子の實」の最後の處、「思ひやる八重の汐汐ヤハシホホとなつてゐるが「八重の汐汐」なんて言葉はないでせう。「八重の潮路シホヂ」に決つてゐる。岩波文庫「藤村詩抄」の誤植であらうと思ひ岩波に問合はせた。岩波からは、小諸コモロの「藤村記念館」にある藤村自筆の原稿が「汐汐」となつてゐるので誤植ではないと云ふ返事があつた。さうすると藤村が言葉を間違へてゐる事になる。「八重の潮路を」「思ひやる」でなければ意味をなさないではありませんか。藤村ともあらう人がどうしてこんな間違ひをしたのでせうか。「八重の潮路」は詩語として昔から和歌に於て用例の多い言葉なのに。」と云ふお話であつた。

藤村の詩に大中寅二が曲を付けた「椰子の實」は私の愛唱歌だつたのに私は「汐汐」について何も氣付いてゐなかつた。帰宅してすぐ調べてみると「八重の潮路」は和歌に用例が多く見出だされること宇野先生のお話の通りであつた。

此の事のすぐあと「清經」の能を見たのだが冒頭まづ脇が「八重の潮路の浦の波」と謠ひ出した。「清經」は「八重の潮路」で始る能であつた。稽古した曲であるのに私は全く忘れてゐたのである。又このすぐあと「求塚モトツツカ」の謠を聴いてゐたら又「八重の潮路」が出て來た。「知章トモキョウ」の能を見てゐたら又「八重の潮路」が出て來た。それで謠曲に於る用例を探してみた。「俊成忠度ジュンセイタクノリ」「須磨源氏スマゲンジ」「絃上ゲンシヤウ」「箴エヒラ」「阿漕アコウキ」と八曲に見つかつた。そして「俊成忠度」がシテのサシ謠ウツヒである他は總てワキの「次第・道行ウツヒ」の謠である事も判つた。それで宇野先生に手紙を差上げてこれらの事を御報告申上げた。

平成十年に藍川由美アイカユミといふソプラノ歌手が「これでいいのか、につぼんのうた」と云ふ本を文春新書で出した。私は藍川由美の演奏會には何回か行き、日本歌曲のCDも七枚位持つてゐてファンの一人である。藍川由美は日本の歌は歴史的假名遣でうたはなければいけないと言つて發音に

非常に注意深い歌手である。だから日本語の歌詞が實にクツキリと美しくきこえるのである。然し此の人の「椰子の實」を聴くと「シホジホ」の音でうたつてゐる。CDの歌詞カードでも「汐汐」となつてゐる。それで私は宇野先生の「八重の潮路を」のお話をそのまま、傳へて、今後此の曲は「ヤ・ヘ・ノ・シ・ホ・ヂ・ヲ」の假名でお歌ひになる方が良いと云ふ趣旨の手紙を書いて文春新書編輯部氣付で藍川由美さんにお送り申上げたのであるが届いたかどうか。全く應答はない。「これでいいのか、につぼんのうた」の中で藍川由

美は「椰子の實」の歌詞にも一寸觸れてゐるが「汐汐」が此の曲が發表された時の樂譜に於るオリヂナルだから此れを正とする考への様である。「思ひやる」との関係で「を」といふ格助詞が來る事には思ひいたつてない様である。「いづれの日にか國に歸らむ」の「む」が推量の助動詞であるから「M」の音でうたはなければいけない。「歸らん」と書いたり、「N」の音でうたつてはいけないと言つてゐる。こつちの方に意識がある様である。私はもう一度藍川由美さんに手紙を書かなければならない。

宇野先生から「八重の潮路」を教はつた事は私にとつて随分大きな事であつた。

藤村の「椰子の實」に於る言葉の間違ひに氣付き、その

マチガヒ
ユエン
間違たる所以を説明なさつた方は宇野先生以外には居ないのではないか。

(まつをかたかのり・彫刻家、元造幣局工藝管理官、本會理事)

情

宇野先生追悼

大口 堂遊

提唱による『平成新選百人一首』の選者をお願ひしたが、様々に議論錯綜する中で、宇野先生が常に明晰かつ適切な御判断を下されるのに一同感服するのが常であつた。

小生が故岩下保先生の御推薦で常任理事の末席に連なつたのは平成五年頃だと思ふが、それまでは國語講演會の懇親會で、故市原豊太先生と共に副會長として會長の木内信胤先生の鄰に坐つてをられる宇野先生を遠くから畏敬の目で眺めるのみであつた。國語審議會の中の數少ない表意派の代表の一人として戦つてをられた宇野先生には、毅然とした鬪將、驍將の印象があつた。朝日新聞夕刊の「少數意見を聞く」といつた題の一頁企畫で正田桂一郎記者のインタビューに答へて宇野先生が人名漢字制限の不當を理路整然と訴へてをられたのを思ひ出す。

泰國盤谷の我が家の居間に、此の色紙が架かつてゐる。平成十六年、家庭の事情で泰國への移住を決意した私に、宇野先生が揮毫して下さつた色紙である。落着いた美しい書體で、御自宅で丹念に認めて下さつた先生の御姿を想像すると、私如き者への温い思ひ遣りが浸み込んでくるやうな感動を覺える。我が家の家寶である。

九十歳を超える御高齢になつても會長を務めて頂き、毎月の常任理事會に御出席を頂いたが、副會長の石井勳先生、林巨樹先生の長期缺席が續いたため、宇野先生の間近に座らせて頂くことが多かつた。折しも、石井公一郎先生の御

晩年の先生はいつも温顔で、目白の國語問題協議會事務局の一室で月一回日曜日に論語、孟子の勉強會を開いて下さつたが、皇太子殿下に御進講された宇野先生から直接論語の講義を聴けるとは何といふ贅澤かと感激した。

さう言へば平成十五年秋、出來たての『平成新選百人一首』と姉妹篇『和歌に見る日本の心』を携へて宮内廳を訪れ、天皇皇后兩陛下に献上したところ、翌日、侍從長より直接拙宅に電話があり「兩陛下より、宇野先生にくれぐれ

も宜敷くとの御傳言を頂きました」と言はれたことは、是非記録しておきたい。

平成十五年にかけ會津若松、京都、仙臺と講演會に伴したのも懐かしい思ひ出だ。本當に百歳まで生きて頂きたかつた。心より御冥福を祈り、御指導の御禮を申し上げます。

(おほぐちだういふ・朝日新聞社友、本會理事、在盤谷)

宇野精一先生を偲ぶ

市川 浩

一月九日宇野精一先生の御訃報に接しました。御尊父哲人先生の御齡を受け繼がれ、九十九歳の天壽を全うせられました。謹んで御冥福を御祈り申し上げます。私は先生の學問的の師承は御座いませませんが、最晩年の不肖の弟子として御薫陶を給りましたことは生涯の仕合せでありました。

先生に直に御目にかかり親炙申上げましたのは平成四年のことでありましたが、其まで長い私淑の歲月があり、その最初は「適情錄」なる明代の碁書でありました。此の本は日本から明にわたつた僧虚中上人が傳へたとされる圍碁の教本で、四庫全書には載つてゐるもの、現物は彼の地には最早無く、獨り貝塚茂樹先生の御藏書にありましたのを今から約二十數年前、これを覆刻し、吳清源、景嘉(清朝の遣臣)兩師と先生の御三方に依る解説を附して刊行せられました。先生の御擔當は「碁經」でありました。「入神」から「若愚」に至る碁の十段階の品格を始め、洵に懇切に解説せられ、其故もありましてか、私の碁力が大いに上り

ました思ひ出があります。先生と手談申上げる機會がなかつたのは残念でしたが、先生御執筆の部分のみ歴史的假名遣によるのを發見して意を強うしたのが私の國語活動の始りでもありました。

後年私は先生の御著書講談社學術文庫版「儒教思想」を読み、已むを得ず新漢字、新假名遣の刊行となつた経緯、さうして正漢字、正假名遣の語を初めて知り、あの假名遣は先生の御信念であつたのだと感銘深く思ひ出しました。私がソフト「契沖」を開發したのを契機に國語問題協議會に入會し、先生の會長御在任中に、國語に何の學識もない私に常任を仰附けられましたのも有難い御縁で御座いました。

先生は國語問題に關しては一貫して正統表記の復活を第一義とされ、最近漢字の問題はかなり改善されて來たが、假名遣はまだ全く解決してゐないと、國語審議會の委員として孤軍奮闘なさつた時のことなど折にふれど御話下さいました。戦後國語表記について文部省統制が如何に酷かつたか、今更ながら國語問題の困難さを痛感しました。平成十三年「平成新選百人一首」編纂の折、版社より解説文は現代表記との強硬な要請があり、其の諾否に就いて理事會が紛糾したことがありました。先生は、自分が會長でな

ければ斷然反對だが、會長の全責任に於て版社の意嚮を尊重しよう、苦澁の御決斷をなさいました。御心中は如何ばかりであつたかと今も胸が痛みます。

先生は日華文化協會の會長も長く御勤めになり、斷交後の日臺文化交流の維持發展に大きな貢獻をなさいました。一月十二日、御葬儀の行はれました當にその日、臺灣では立法院の選舉が行はれ民進黨が慘敗を喫しました。臺灣の親日勢力の退潮が憂慮される事態を迎へ、先生を失つたことの痛手は計り知れないものがあります。しかもこのことを論ずるメディアはなく、先生の卓越高邁な御信條に耳を傾けようとしなない「時流」を憤るよりむしろ、この「時流」に流される日本の將來に不吉な豫感さへ抱かざるを得ません。僅かでも先生の御薫陶を受けた者として、私なりに歴史的假名遣の復活を少しでも前進させようと、先生の御靈に御誓ひ申上げる次第であります。

(平成二十年三月四日)

(いちかはひろし・(有)申申閣代表、本會理事)

宇野先生のこと

川畑 賢一

宇野先生が二宮中學でお話をして下さつたのは昭和五十六年十一月十三日（金）生徒會主催の文化祭に於いてであつた。演題は「學ぶ」といふ事、対象は二宮中學校全生徒及び教職員であつた。

手許の平成四年三月刊の二宮中學校の校誌「暁の鐘」第八十號に先生の講演録が再録せられてゐる。

學ぶとはどういふことか、どういふことを學べばよいか、學ぶ時の心がけは、態度はとの點についての御話であつた。眞似る事の重要性を孔子の忠恕の解説とともに、一人前の人間として立派に親には孝行する、兄弟仲良くする、友達とは仲良くする、嘘は言はない。孔子も言ふやうに、これだけ出来れば立派なものだからこれを出来るやうになる事であり、二宮金次郎は立派な人だつたと。

勉強の方法・心構へは「學は及ばざるが如くすれどもなほこれを失はんことを恐る」であり、「學びて思はざれば則ち罔く、思ひて學ばざれば則ち殆し」である。學ぶことばかりで自分では少しも考へないのはだめだ。自分で考へ

てばかりゐて本を讀んだり、人の意見を聞かないのもだめだ。最後に韓退之はものを學ぶ場合には自分を意識してはいけない、先生からものを學ぶときは素直に受け取らなければ眞似は出来ないといふ。

學問の話と言へば難しくなりがちだが、先生の話は少しも難しくなく、今讀み返すと忘れてゐる事を再確認させられて非常に新鮮である。

先生の御講演は、國語國字問題の是正と正統國語表記を熱心に實踐する同僚や仲間が當時二宮中に私を含め少ないながらゐた緣故に依る。

だが、大人を相手にした時の先生の御話や御提言はかうではなかつた。

明治書院から出されてゐる宇野精一著作集第六卷は先生の講演や全国各地の新聞雜誌などに發表なさつた事を巻頭に國語國字問題、次に教育問題、最後に時評・隨想と三部門に分かつて一本六百餘頁に纏めた大著である。割かれた頁數を見るとおよそ國語國字問題が二百頁、教育問題が百三十五頁、時評・隨想が二百八十頁である。どの頁も眞つ向眞劍勝負といふ氣概の文章が正々堂々の精神で貫かれて展開する。

頁數の上からは時評・隨想が多いが、この中で先生の

番の關心事は國語國字問題であると二頁に亘る後書を讀めば判る。そのほとんどは先生がこの問題に氣づかれて以來お亡くなりになるまで反對であつた政府の政策の非を鳴らされ、是正を目指し、解決した事と残された國語國字問題について述べてある。残された問題とは人名漢字と假名遣だ。これが出版は平成二年であるが、現在に至るも先生の目指されるやうには解決してゐない。即ち人名漢字が政府により制限せられてゐるのは我々の表現の自由の甚だしい侵害であり、戸籍法の改正をすべきである。今ひとつの假名遣は現代假名遣には種々の矛盾や不合理があるから、傳統的な假名遣（私共は正假名遣と稱してゐるが、世間では歴史的假名遣といつてゐる）を正當なものとしなければならぬ、と。

國語教師の私には先生の御著書第六卷の國語國字問題は進路を正す羅針盤である。

世に著作集を残す學者文化人は少なくない。が國語國字問題を論じて大部と成る者はほとんど無い。國語漢文關係の學者・教員にして然りである。

宇野先生は書齋の學者ではなかつた。そこに私は學ばなければならぬ。

（かはばたけんいち・船橋市立坪井小學校校長、本會評議員）

しやしやしきの江戸つ子

安田 倫子

記憶を辿ると、この國語問題協議會では、宇野先生と、ケルト語の三橋先生が傳統的で美しい江戸辯を嗜んでをられた。

宇野先生は私の知る限りにおいて、「生粹」の「江戸辯」を「喋る」貴重な人だつた。國語問題協議會でしかお目にかかる機會がなかつたので、先生の「私語」については採集のしやうがなかつたのが残念である。

先生は、外見から受けるスマートさは勿論、一舉手一投足、私が幼い頃からラジオや映畫の中でいきいきと聽いた、江戸つ子のそれであつた。

- ① 聲に丸みがあつて、齒切れが良い。
- ② 語尾をきつぱりと結ぶ。
- ③ 促音便の多用。（小さい「っ」）
- ④ 時々撥音便（ん）。けれども、これは、今の變な使ひ

方ではない。今の變なといふのは「行きまますんで」「しますんで」など。

⑤少々早口で澁みがない。

⑥なにしろ響きが良い。

*先生の聲質の丸み、音聲波動の立體的（コロコロと周圍に廣がつていく）であるのに比べると、先生以降の年代では聲が扁平になつて來てをり、音も不鮮明である。

會でのご講演のテープが残されてゐたら、一部分だけでも公開していただけると、何よりの後身への資料になると思ふ。それは、ただ、會の財産としてばかりではなく、廣く日本語を傳へて行きたいと願ふ大勢の共有すべき財産になるのではないか。

國語問題協議會は、言葉に對する最も意識の高い、専門家の集團である。日夜、歴史的な流れとして無理の無い、正しい日本語を傳へようと意見を發信し續けてゐる素晴らしい會なのだ。資料は多いほど良い。

（會長先生を資料にしてしまつた。先生、平にご容赦願ひます。これが私なりの先生への追悼の意の表し方です。）

（やすだともこ・教育研究室「てら」代表、本會評議員）

宇野精一先生の志を

谷田貝常夫

八年前、國語問題協議會の理事會に顔を出すやうになつて、以後毎月、宇野先生にお目にかかる機會に恵まれたが、それ以前に御會ひしたことが二度あつた。最初は、福田恆存を中心とする、蔦の會と名づけられた讀書會の一環として湯島聖堂に赴いた時で、宇野精一先生から講義を受けたのである。偶々手許に残つてゐた記録から、昭和四十一年三月とわかる。福田恆存と宇野先生は、國語問題協議會で肝膽相照らす仲であつたから實現した勉強會であつたのだらう。話は禮についてだつたが、何より宇野先生の聲咳に接せられたことが嬉しかつた。白皙、瘦身、英國紳士風の着こなし、背筋を眞つ直ぐに伸して明瞭な發聲で話された姿はまさに繪になるもので、心に爽やかな豊かさを感じとつたものである。後年毎回のやうに協議會主催の講演會で話をしてくださつた時の姿と、年齢に差はあれ寸分違はないものであつた。

二回目に御會ひしたのも、湯島の斯文會だつた。私が停

年直後から手傳つてゐた漢字ソフトの「今昔文字鏡」によつて、十萬字程の漢字が電算機で使へることを知つていた

因みに宇野精一先生は、平成五年から十七年まで本會の會長を務められた。

(やたがひつねを・本會事務局長)

だくために、こちらから申出た面會だつた。勿論先生は最後までコンピュータの機械そのものとは縁もゆかりも持たれなかつたが、漢字がかなり自由に使へることに感歎された御様子だつた。そして言はれるには、西夏文字は入つてゐるのかね、と。疾づくに使はれなくなつた文字について何故さう聞かれたのかはわからないが、そのやうなところに宇野先生の持ち味があるやうに感じた。新聞で見聞きしてゐる限りでは、先生はいくつもの會長を務められてゐた。うる覚えではあるが、「巢鴨プリズンを残す會」「スパイ防止法を成立させる會」等々である。國語問題でも國語審議會をはじめ、多くの會合に参加されてゐる。しかも、どの會も目的を達してはゐない。實現しないとわかつてゐても、已むにやまれぬお氣持から立上られたものなのであらう。あの細いお身體でありながら、まことに意志的行動的な生き方をされたものと感心する。宇野先生が當初から加入された、この五十年にわたつて活動を續けて來た我が國語問題協議會も、さて、歪められた國語の正常化を達成するには程遠いところにある。宇野先生の諸活動同様、何時所期の目的が實現できるのであらうか。



言葉の雑學 (十)

鹽原 經央

【なめくぢ】實物を知つてゐればなほさら、この種の語は國語辭典では調べまい。「陸生の巻貝でカタツムリ・キセルガイに近縁であるが、貝殻は全く退化している」(『広辞苑』)とあつて「ハハアあれも巻き貝か」と思ふ。ナメは滑、クヂは語源不明だがヂを用ゐる。

【にいさん】兄を「にいさん」といふのは「あにさま(兄様)」からの變化であらう。「ねえさん」が「あねさま」、「かあさん」が「かかさま」、「とうさん」が「ととさま」からの變化で、歴史的假名遣ひでもそれぞれエ、ア、ウを添へて書くやうに「い」を用ゐて書く。

【ぬえ】「鵞」と書く。源頼政に射落とされた首が猿、體がタヌキ、脚が虎、尻尾が蛇、聲は小兒が叫ぶやうな怪鳥。轉じてよく分からない正體不明の人を指して「鵞のやうな」と表現する。歴史的假名遣ひは、今の書き方と

同じヌエ。數少ない例外として覺えればよい。

【ねえさん】「あねさん」のアが落ちてネが延びたネーサンの語形で、歴史的假名遣ひでも「え」を用ゐて書く。俗ななまり方で「ゐない」ことをイネーといふことがあるが、姉の所在を尋ねられた弟の返事は「いま、ねえさんはゐねえ」と、ともに「え」を用ゐて書く。

【はい】呼びかけられたときの應答、もしくは尋ねられたことを肯定するときなどに用ゐる感動詞。歴史的假名遣ひでも「い」で書く。この語がいつごろから使はれたか不明だが、そのときもハウイやハフイのやうな音ではなく、ハイと發音してゐたと考へればよい。

【はう】「私のはうが三つ年上です」などと用ゐる形式名詞「方」の字音假名遣ひはハウ。漢字の構成要素に「方」を持つて、今日ハウと發音される漢字はおほむね字音假名遣ひはハウと見てよい。芳・放・傲・訪の類。「放る」は字音由來ではなく和語。ハフルになる。

【はうき】ほうき(箒)は「ははき」から來てゐる。「羽掃キあるいは葉掃きか」と『岩波古語辞典』にある。歴史的假名遣ひで「はう」と書くのは「はは」からの變化だからである。尾を引く光の形狀の似る彗星(すいせい)の異稱ほうきはしも「はうきはし」と書く。

【はうむる】現代假名遣いではホウムル(葬る)の古い語形は「はぶる」で、埋葬するの意である。このハブルが長音化したハウブルがハウムルとなつたもの。別に放ち捨てるの意の同根の語に「はふる」がある。今日の「放る」の歴史的假名遣ひは、だからハフル。

【はづ】文語の動詞の終止形で、ズとなるのは漢文訓讀で單漢字をサ變に用ゐた案ズ・演ズ・信ズの類がほとんどで、純粹和語では交(ま)ズ・彈(は)ズしかない。福田恆存。耽ヅ・閉ヅ・奏ヅ・撫(な)ヅなどはヅだ。耽ヅの派生語耽ズカシイも歴史的假名遣ひはヅ。

【はづれる】「外れる」と書くやうに、ある範圍の外側に

なるといふのが原義。「町外れ」は、町の端っこ、の意。さう考へると、「端(はた)」あるいは「果て」などと關係のある語かもしれない。歴史的假名遣ひがヅなのは、それを暗示してゐる。「外す」もハヅス。

【はふる】今日では「剛速球をホウル(放る)好投手」のやうに、投げるの意にも用ゐるが、どちらかといふと「勉強を放つて遊びほうける」のやうに、放棄するの意の方が原義に近い。かつてはハブルの語形で、「葬る」の古形ハブルと同根。歴史的假名遣ひはハフル。

【ひいき】特に目を掛け、引き立て肩入れすることを「ひいき」といふ。漢字で書けば「鼠賈」だが、「鼠」の字音はヒ、「賈」の字音はキだから、本當は「鼠賈」でヒキ。このヒキが發音の便に従つてヒーキと延びたので、歴史的假名遣ひでも「い」を用ゐて書くのである。

【ひえ】「稗」と書く。禾へんに卑しいと書くのは、食糧としては下等だつたからであらうか。生命力が強く、や

せ地にも生育するといふ備荒作物。『大言海』によると「日得（ヒエ）ノ義、日毎ニ盛ニ茂グレバ云（い）フ」と。歴史的假名遣ひは、ヒエでヤ行のエである。

【ひきゐる】「猛虎軍團を率ゐる星野監督」のやうに指揮、引率の意に用ゐるヒキイルのイルは古語「ある（率ゐる）」に「引き」が上接した語形。だから、現代語形「率ゐる」は「引き率ゐる」と書いた方が語のなりたちが分かる。が、「率」をさう訓じる場合は「率ゐる」。

【ひぢ】肘、脇、臂などと書かれるヒジの歴史的假名遣ひはヒヂ。肩から肘までを二の腕またはカヒナといひ、肘から手首までをタダムキの間の折れ曲がる所。そこで、『大言海』は「引縮みノ意ニモアルカ」と思案してゐる。

【ひとりづつ】ツツは現代假名遣いではズツが本則。ツツは語源的には一つ、二つと數へるときに下に添へるツを重ねたものと考へられる。『岩波古語辞典』に「分量

を示す語の下について、等量に割つて、順次進んで行く場合に用ゐる」とある。ツツと書くべきなのだ。

【ひわ】鶺鴒（ひわ）は「鳥」と「弱」の合字なので、イワシ（鰯）と同様に考へて、「ひわ」とされること少なくなかつた。が、『大言海』は「鰯ハ脆（もろ）ク死スレバ弱シナリ。鶺鴒ハ弱キニアラス、其の形ノ纖小（ヒハヤカ）ナル意ナリ」と、「ひは」を可とする。

【ひをどし】ヨロヒを着て戦をする時代でないのは、はや時代小説の中の言葉になつてしまつたが、ヒオドシ（緋緘）つまり赤色のヨロヒは歴史的假名遣ひではヒヲドシ。ほかに語中語尾のヲを取る語に、メヲト（夫婦）、カハヤソ（川瀬）などがあるので記憶しておかう。

【ふえ】動詞の活用語尾のほかに歴史的假名遣ひでも語中語尾に現れるエとして、まづ「ふえ（笛）」が擧げられる。「吹柄（フキエ）、或（あるい）ハ、吹枝（フキエ）ノ略カト云（い）フ」と『大言海』にある。合點が行かう。

だから、縦笛も横笛もタテエ、ヨコエ。

【ふぢ】富士山のフジは歴史的假名遣ひでもフジだが、植物のフジ（藤）はフヂ。萬葉假名に「布治」とするものがあり、治の字音は漢音チ、吳音ヂなので、往時は富士のフジと藤のフヂと別々の發音がなされてゐたことが分かる。藤原氏の藤原も、假名遣ひはフヂハラ。

【へうたん】戦後、漢字制限の影響で動植物名を片假名で書く習慣が廣まり、ちよつとした難字が書けなくなつてきてゐる。ヒョウタン（瓢箪）の瓢の字音はへウ。だから、冗談半分のことが現實化するといふときに用ゐることわざは、「へうたんから駒が出る」と書く。

【ほほづき】ホオズキの實の中身を抜き口に含んで音を立てる遊びは昔からあつたやうだ。『日本国語大辞典』に「ホホヅキのヅキはカホツキ、メツキなどのツキの連濁形か」との語誌が載る。口に含むとふつくらほほがふくらむ様子を寫した語か。正しい假名遣ひはヅ。

【まうける】設ケル・儲ケルとも歴史的假名遣ひはマウケル。文語の終止形マウケはマクとも言つた。マクの長音化がマウクといつた方が適切かもしれない。『字訓』に「目（ま）の活用形」とある。目配りをするやうにして事に備へるといふのが原義であらう。

【まうす】「申す」の歴史的假名遣ひはマウス。それはマウスのウ音便だからだ。古事記では「老夫（おきな）答へ言（まを）さく、『僕（あ）は國つ神大山津見（おほやまつみ）神の子なり。僕が名は足名稚（あしなづち）……』とまをしき」のやうな使ひ方をしてゐる。

話言葉と書言葉

土田龍太郎

外國語については言ふまでもなく國語の場合でも、會話に巧な人が必ずしも良い文を綴るとはかぎらず、また名家がいづれも會話に練達してゐるとはかぎらない。このことを緒として話言葉と書言葉の關係についていささか考察を試ることにしたい。もつとも、例へば幸田露伴のやうに談話の妙手がそのまま文章の達人であることがあり、話上手の文がおしなべて下手だと決めつけることはできぬであらう。會話と談話と演説は、いづれも話言葉でなされるものでありながら、しかも三者はそれぞれ話體を異にしてゐるため、談話の名人がそのまま會話の達人とはなりえぬからである。

それはともあれ、きはめて話上手でありながら、筆を執ればただ可もなく不可もないごくありふれた文しか書けないといふ人は世に稀ではない。逆にまつたく話の下手な人がこよなく秀れた文をものすることがある。韓非子などはまさにその好例であらう。司馬遷は非爲人口吃不能道說而

善著書と記し、かれがひどい話下手であつたことを傳へてゐるが、かれの遺した論著は莊子や左傳と並ぶ先秦代屈指の名文である。

なぜこのやうなことが起るのか、理由はさまざまに考へられよう。話すときは眼前に相手がりつねに卽座の應答を迫られるのに對し、文章は後からいくらでも手を加へて改めることができるから、時間をかけ推敲彫琢を怠らねば話の下手なものもいくらでも良い文を綴ることができるのだ、といふのはたれしも思ひつく一應の理窟である。しかし手間暇をかけさへすれば良い文章が出来あがるといふものではあるまい。

言ふまでもなく同一國語の話言葉と書言葉がまつたく異なるものでありうるはずはない。しかし兩者はまつたく同じものともなりえない。話言葉に沿ふ思惟や情感がまづ分解され、書言葉に内在するなんらかの規矩のごときものにおのづから違ひながら再構成を遂げてはじめてまともな文章が生れるのである。文章の良否はまさにこの分解的再構成的過程の有無または成否に懸つてゐる。

話言葉と書言葉の微妙な不即不離的關係を見ずゑようとしなければ良い文章は生れない。良い文章が生れなければ、一國の文運のみでなく文化全般が衰退することになりかね

ない。まさに文章は經國の大業なのである。

話言葉と書言葉の構造的差異を認めようとせず、話言葉になるべく近づけただれにも解る平易な文章こそが良い文章なのだ、といふ單純な文章観にかなり多くの人が拘はれてゐる。このやうな文章観が國語教育を左右するほど優勢になれば、結局せいぜい「山びこ學校」とか「綴方教室」のやうなものしか生れぬであらう。「山びこ學校」には確かに讀むものの心を撃つ作文が收められてゐる。しかし、この感動はほんたうに卓れた文章から受ける感動と同じものではない。

だれにも判る文を記さねばならぬといふ場合は確かにある。例へば、緊急避難の指示、藥品の服用法、機械器具の操作法などは、できるだけ平易でしかも正確な文もて傳へるにこしたことはない。福澤諭吉が宿屋の女中にも解る文章を著すやうに努めたといふ話によく知られてゐる。かれのこの努力はいはゆる近代國家の要件たる全國民通用の文章語の確立を目差すものであつたと考へられよう。しかし知的精神的營爲の究極をなんとか表現しようとするときは、このやうな啓蒙主義的文章観ではとても立行かない。この文章観は、言語とはただ意思傳達の手段にすぎぬといふ誤れる言語観に基いてゐる。いはゆる高等教育を受けた

ものが宿屋の女中にも解る文章しか作れぬやうでははなはだ心元ない。そもそも文章とは世間の皆に解らせる必要のないものである。むしろほとんどだれが讀んでも解らないほどに秀れた文章を著さうと志すものがあつてよいのではなからうか。

いづれにせよ話言葉と書言葉は必ず分岐する。現代通用の文體たる口語文體を言文一致體と呼び、また話すやうに書け、書くやうに話せと唱へられることがある。しかし現今の口語文においてすら言と文とは決して一致してゐない。まづ少くともかなりはつきりとした語彙の相違が認められる、また例へば書言葉ではほとんど不可缺な「である」といふ語は話言葉ではまづ用ゐられぬであらう。兩者の懸隔を亡くすることはできないのだ。つまり口語文とは實は新文語文にはかならない。そしてほんたうは現代においてもこの新文語文を諸種の舊文語文と併用することがもつとも望ましいのである。

話言葉と書言葉がすつかり同化するとはありえない。では兩者はそれぞれの自立性とたがひの相補性を保ちながら併行的に發展してゆくのであらうかといへば、事態はそれほど單純ではない。書言葉は話言葉と並んで進むやうに見えながら、實は古い文語文と新しい俗語の雙方からの働

きかけを蒙らずにはをれぬものである。そして多くの場合は、古い書言葉よりも新しい話言葉の方がはるかに強い牽引力を發揮する。もしもこの牽引を振切るやうにして書言葉がまつたく独自の道を行かうとするならば、その書言葉はやがて通用口語文としての地位を喪ひ、かはりに舊文語文の一種として固定することになる。逆に書言葉がただひたすら話言葉に引きずられてゆくならば、その書言葉は大きな變容を遂げざるをえず、そしてもしその變容が順當なものであるならば、新新文語文としての地位を新に得ることにならう。言語とはなぜか時とともに變化してやまぬものであるが、あと二百年もすれば、よほどの學識を具へた人士でないかぎり昭和平成の平易な口語文を読みこなすことすら難しくなるであらう。

すでに述べたやうに、話言葉は書言葉に強い牽引力を及ぼすものであるが、逆に書言葉の影響をまつたく受けぬわけにもゆかない。そして話言葉はなぜか書言葉より短命である。したがつて古い時代の話言葉を多く含む小説や戯曲はいづれも難解である。十返舎一九の東海道中膝栗毛より曲亭馬琴の椿説弓張月のはうがはるかに読みやすい。話言葉と書言葉の關係は錯綜をきはめてをり、ここでそのすべての局面を述べることは到底できないが、両者がまつたき

融合を遂げることはありえず、また人爲的な融合を強ひてはならぬことだけは確かである。

さて、生活とは演技であるといふ思想がある。これはたやすく誤解を招くまことにきはどい思想であり、ここで詳述しうるものではないが、私もやはり生活は演技であると考へる。もしも生活が演技であるならば、文章もまた演技であるにちがひない。しかしここで言ふ演技とはみづからを偽り飾るための藝ではなく、みづからがみづからを的確に把握しかつ表現するための術である。すでに述べたやうに話言葉が解體を経て書言葉へと再構成されゆく過程に伴ふ思惟や情感の危機的躍動が演技であると言へるのではなからうか。高次の眞實とはなんらかの虚構をとほしてはじめて顯現するものであらう。

文章を演技であると見なすとき避けて通れぬものが修辭である。修辭とは本來不要なものであり、例へば「山びこ學校」所收の作文のやうに偽らず飾らず思ふことをありのままに述べるのが良い文章である、といふ幼稚な文章觀の信奉者は少くない。このやうに修辭を頭から悪しきものと見なす風潮は日本だけでなく諸外國でも思ひの外に優勢であるらしい。夏目漱石の「坊ちゃん」を読めば、明治三十年代の田舎の中學校にも修辭學の教師のゐたことが判る。

當時どのやうな修辭學授業が行はれてゐたのかぜひ知りた
いものである。もつとも私は修辭學を現在の學校教育の一
科目とすべきであるとは考へない。修辭學的關心をもほど
よく懐きながら古今の名文を分析味讀すればそれでよいで
あらう。文章が修辭倒れになるのは宜しくないが、青年の
文章修行のあくまで一階梯として修辭倒れの文を綴る時期
があつてよいやうにも思ふ。あらゆる修辭技巧を自家藥籠
中のものとし、もはや修辭を意識することなく、修辭を究
め修辭を超えて、あるいは豪宕不羈なまたは纖弱艷麗な、
曲折に富みしかも明晰な文章を自在に作ることができる、
これこそが至高の目標である。ただし神技の究まるどころ、
まことの名文がかへつて「山びこ學校」生徒の作文に似て
稚拙朴訥に見えることはありえよう。文章もつひに大巧若
拙の一句に歸着するのではあるまいか。

(つちだりゆうたらう・東京大學教授サンスクリット語學研究)

(ことばと文化 10)

慶應義塾志木高等學校二〇〇六年三月十五日發行より轉載)

漢字・漢語と日本―外交的觀點から考へる

加藤 淳平

現在の日本は、米國との友好・協力關係こそ鞏固である
が、周邊諸國との關係に多くの問題を抱へる。北のロシア
とは北方領土問題、北西の北朝鮮とは拉致問題、西の韓國
とは竹島問題、更にその西の大國中國とは様々な問題が山
積、南の臺灣とは問題は少いが國交も無い。今の福田首相
の父君の故福田赳夫首相は、曾て「全方位外交」を唱へた。
其の理念は今も否定されては居ないだらう。日本は、地理
的位置から言つて、米國の方位だけを考へて居れば、國が
成立つ譯ではない。國益の爲に、周邊諸國との關係を眞劍
に考へる必要があるのは、言ふ迄も無い。

日本が今の様な狀況に陥つた端緒は、米國の占領政策に
ある。日本との講和を推進したジョン・フォスター・ダレ
スの祕密覺書には、日本人の、中國人に對する優越意識と
歐米に對する劣等感を利用し、歐米が日本を平等に扱ふ事
に因つて、日本を中國から引離し、歐米の仲間に引込む、

と書いてある。それが米國の國益であつた事は間違ひ無い。だから米國は、ダレス以降も一貫して、同じ方向の努力を續けて來た。一見それは成功したかに見える。

然し私には疑問もある。或る時、と言つてももうかなり前の一九八〇年代のことだが、米國の外交官と、可成り長い時間に互つて議論をした事がある。米にとつての日本の價値は、太平洋國家としての米國が、宿命的に付合はざるを得ない東アジアの、異文化なるが故に理解も共感も難しい國々の中にあつて、日本だけが半ばは理解可能な國になつて居る、だから日本との友好關係、協力關係は、米にとつて貴重なのだとその外交官は強調した。そして斯うも言つた。日本がアジア的特性を備へたアジアの國だから、米にとつて貴重なのであつて、日本が生半可に歐米化したら、日本の價値は低下すると。昨今米國の日本に對する評價が、一頃より下つたかに感じられるのは、其の事と關係があるかも知れない。

さすれば現在の様な日本と周邊アジア諸國との關係は、必ずしも米國が望んだ事ではない。現に米國は、日本と周邊諸國との關係改善の爲、折に觸れて外交努力を行つて來た。例へば會ての日韓關係、昨今の日中關係の如く。

日本と周邊アジア諸國との關係の核心は、中國との關係である。米軍占領時代に日本は、漢字制限や漢文學習の削減等、日本古來の文化傳統を斷ち切り、中國との文化的紐帶を弱める措置を採つた。これは占領軍の命令だつた譯ではなく、寧ろ占領政策に迎合・便乗した一部の日本の知識人が進めたものだ。その影響は今に及び、日本と周邊アジア諸國との關係の基礎を掘り崩して居る。

今の日本人は、昔と比べてすつかりアジアから離れた。中國に對する反感・嫌惡感・違和感は強く、會て知識人の持つて居た漢學の素養は消滅した。暫く前に、今は物故した或る自民黨の代議士から、こんな話を聞いた事がある。この人が初當選した時、同期當選の代議士の會を造る事になり、最年長の此の人が會の名前を考へる様頼まれた。結局有名な王維の詩に基づいて「青々會」と名付け、本人は餘りにありふれた命名の仕方なので、内心忸怩たるものがあつたが、何と他の誰も、名前の由來も王維の詩も知らなかつたと言ふ。政治家の間でさへ、漢學的素養の消失、斯くの如し。

若い日本人が漢字を知らない事は、誰の眼にも明らかだ。

國會中繼を聴いても、漢字の読み方の間違ひは一々指摘するのが恥かしくなる程。日本語の抽象名詞の大部分は漢語であり、漢字の知識が低下すれば、抽象的思考能力も衰へる。現在の日本人の抽象的思考能力の衰へが目を覆ふばかりなのは、漢字の知識の低下に因るだらう。

論語の中で、孔子が弟子の子路に政治を問はれて、「先づ名を正す」と答へ、子路から「迂なるかな」と笑はれる件りを覚えて居られる方もあらう。孔子は「名正しからざれば言順はず、言順はざれば事成らず」と斷言する。

この孔子の言葉は、日本の現状に對する痛烈な批判に成つて居まいか。言葉や概念が、正確に意味を確定しない儘、安直に使はれる。その結果言葉・概念と事實との間にずれが生ずる。事實に即せず、意味も不明確な氣分的論議ばかりが行はれて、物事は進まない。政治家は無責任に言葉を弄び、政治家の言葉に對する信頼が失はれる。斯うした事凡て、元を正せば國語教育を輕視し、言葉を安直に扱つた結果ではないか。

歐米の知識人は、言葉の意味に疑念を生じた時、ラテン語やギリシヤ語まで含めて、語源に溯つて考へる。だから辭書には、單語ごとに語源が示される。日本語には漢語に由來する言葉が多く、語源を訪ねれば中國の古典語に到達

する。國語を正確に使ふ爲には漢語の知識が不可欠であり、漢語の知識があやふやになれば、國語の使ひ方もいい加減になる。漢字や漢文の教育がおろそかにされた事に因つて、日本人の思考は嚴密さを缺く様になつた。

漢語の知識と漢學の素養の低下は、日本と中國、或いは韓國等の東アジア諸國との相互理解の爲の障害ともなる。抽象名詞の大部分が元は漢語だつた事は、朝鮮半島の國でも同じだからだ。日本と中國、日本と韓國・北朝鮮は、可成りの程度、用語と概念を共通にする。例へば大陸中國と北朝鮮のマルクス主義の用語は、殆ど日本で翻譯された漢語である。日本と中國の漢字は、相違點は多いものの相互に類推・理解が可能だが、朝鮮半島ではハンゲルで書かれるから、もともと同じ言葉だといふ事實すら分らない。

韓國や北朝鮮の人が讀めば怒るかも知れないが、朝鮮半島にハンゲルの學習を弘めたのは、日本總督府である。日本總督府には、日本語表記の假名文字化から豫測される思考單純化の隱された意圖が、或いはあつたかも知れない。朝鮮半島の人が、日本の植民統治の意圖したかも知れない。思考單純化から脱却するには、ハンゲルだけの表記に固執せず、漢字・漢語の學習に力を注ぐ必要がある。日本と朝

鮮半島の國と中國とが、漢字・漢語を共有する利點をよく認識すれば、三つの言語を、漢語を介して自動的に機械翻譯するソフトの開発も可能にならう。

日本は、東アジアに於ける近鄰諸國との關係を、長期に亘つて安定させる爲に、先づ隗より始めよ、だ。先づ我々が、日本に於ける漢字・漢文の學習を擴充しなければならぬ。現在の日本の學習漢字數は、將來の近鄰諸國との交流を考慮すれば少な過ぎる。漢字と漢文の學習を弘めるのは、我々が祖先から受継いだ文化傳統を大切にし、正確に國語を驅使用する爲でもある。

今の日本に於ける中國語學習、中國に於ける日本語學習は、日本人はピンインから、中國人は假名から始める。漢字・漢語の共通性が、十分に活用されてゐない。日本人にとつての中國語は、読み、書き、話すこと、聽解の順に難しい。中國人にとつての日本語も同様だらう。相互の言葉の學習を會話から始めるのは、わざわざ最初のハードルを高くするものだ。

現代の中國では、臺灣との交流の必要から、簡體字、即ち簡便化された漢字だけでなく、古い漢字體、即ち繁體字も學ぶ。繁體字も含め、漢字は日本漢字教育振興協會の活

動が實證する通り、低年齢であればある程、多くを學習出来る。學習年齢を低くすれば、日本人の學習漢字數は増加し得る。

中國の古典文と現代の白話文は大きく違ふが、文法は相當程度共通する。或る程度の數の漢字と漢文の知識が前提となるが、漢文から現代中國語文の讀みに進むよいカリキュラムが作成できれば、一年程度の學習で、現代中國語が讀める様になるのではないか。中國人も漢字の拾ひ讀みで、日本語文の大意は理解できる。讀みの次は書き方、話し方、聽解と進むのがよい。書き方まで進めば、電子メールの遣り取りが可能になる。多數の日本人と多數の中國人が、日本語と中國語でメールを遣り取りする日が来るのも夢ではない。

日本人観光客が中國を旅行する時は、メモ用紙を携へて行つて筆談すればよい。私は本格的に中國語を學んだ事が無いが、筆談で中國各地を旅行して不自由を感じない。中國人旅行者にとつても、同じ事ができれば、日本観光旅行はずっと容易になる。大勢の、而も年々増加する中國人観光客が日本を訪れる事の經濟的利益は、衰頹氣味の日本國內の觀光産業にとつて計り知れない。

日中兩國の間で無数のメールが行き交ひ、多数の観光旅行者が相互に往來する事になれば、少なくとも多くの誤解は吹っ飛んでしまふだらう。一部に反感が強まるかも知れないが、相互理解の深化のために避けられない過程だ。日本の長期の國益には適ふのではないか。

(かとうじゅんべい・元ベルギー大使、本會評議員)

人情

だぢづでど (第一回)

高田 友

高田 やあ、健太君。おめでたう。入試に合格してから、會ふのは始めてだよ。

健太 あ、先生。僕が合格できたのは、先生のおかげですよ。苦手の英語が、豫備校で先生の授業を受けて、一番得意になつたんですから。

高田 本當にさう思つてゐるのなら、すぐに電話を掛けて來るはずだと思ふがね。

健太 すみません。手續きなんかで、忙しかつたもので。——さうさう、手續きと言へば、ちよつと伺ひたいことがあるんですが。

高田 うまく話を逸らしたね。言つてごらん。

健太 入學手續きで、名前をローマ字で書く欄があつたんですよ。そこで、「吉田」の「し」をㄷと書いたら、ㄷと書けと言はれました。ㄷといふ書き方とㄷと、いふ書き方があることは知つてゐましたが、何か使ひ分けがあるのですか。

高田 うん。さうだね。英語なら、*st* と *stɪ* はどう発音し分けるかね。

健太 「スィップ」と「シップ」の違いぢやありませんか。

高田 そのとほりだ。その原則を應用したら、吉田の「シ」は、どつちになると思ふ？

健太 さうしたら、*stɪ* になるでせうね。

高田 ぢやあ、*sa, si, su, se, so* と書いたら、どういふ発音になるかね。

健太 「サ、スイ、ス、セ、ソ」ですよ。

高田 さうなんだが、論理的整合性といふことを考へてみると、をかしくないかね。同じサ行音なのに、どうして「シ」だけにさういふ問題が生じるんだらう。

健太 日本語のほうに問題があるのでせうね。

高田 さうなんだよ。日本語の音節は、ほとんどが「子音＋母音」で成り立つてゐることは知つてゐるよ。

健太 「カ」が「*ɸ* + *ɸ*」で出来てゐる、といふことですね。

「カ」を伸ばして發音すると、「カア」と「ア」の音が出て来るし、「キ」を伸ばすと、「キイ」と「イ」の音が出て来るんですよ。

高田 うん。それは君のやうな優秀な生徒は、たいていの子が知つてゐるんだ。言ひ換へれば、「ア列音」は、「カ」

も「サ」も「タ」も、言ひ終はつたときの口の形が同じになつてゐるといふ意味なんだよ。

健太 さう言はれば納得できます。

高田 さうすると、今度は、「カ行音」は「カ」も「キ」も「ク」も言ひ始めるときの口の形が同じだといふことになるね。

健太 なるほど、それが論理といふものですね。

高田 ところが、サ行音の場合は――。

健太 さうか。「シ」の場合だけ、言ひ始める時の口の形が違ふんですね。

高田 「シ」以外にはさういふ例はないだらうか。同じ行の他の音とは、言ひ始めるときの口の形が違ふ音節が。

健太 言ひ換へれば、子音が違ふといふことですよ。さうか。ローマ字で考へればいいんだ。「チ」と「ツ」ですね。

高田 さうだね。もし、タ行音の子音がみんな同じだつたら、どういふ發音になるだらう。

健太 「タ・テイ・トウ・テ・ト」になるでせうね。

高田 うん。さうだ。そこで、「シ」「チ」「ツ」が「スイ」「テイ」「トゥ」と發音されるのを避けるために、*shi, chi, tsu* と書くやうになつたのさ。

健太 でも小學校のときは、*si, ti, to* と習ひましたよ。

高田 さうだね。*sa, shi, su, se, so* と書くこと、同じサ行な

のに、統一性が破れるから、*sp*を*s*と書きたい気持ちも分かるぢやないか。でも、發音を考へると、*sp*と書きたい。特に、ローマ字は外國人に理解してもらふことが大きな目的なのに、*sp*ではアメリカ人は「スイ」だと思つてしまふからね。*st*と書く方は、文部省が訓令で決めたので、「訓令式」とか「日本式」とかいふんだ。そして、*st*と書く方は、明治時代に日本にやつてきた米國の學者のヘボンが開發したので、「ヘボン式」と呼ぶんだよ。

健太 ああ、「ヘボン式」つて、聞いたことがありますよ。

高田 ついでに、ヘボンといふ人は、女優のキャサリン・ヘップバーンのおちいさんなんだよ。

健太 「ローマの休日」、この前、テレビでやつてみました。

高田 あれは、オードリー・ヘップバーンだよ。もう一人、ヘップバーンといふ姓の大女優があるんだ。オードリーより二十歳ほど上だがね。

健太 へえー。さうなんですか。アッ。分かつた。ヘボンといふのは、ヘップバーンを早口で言つたんですね。

高田 ははは。早口といふわけぢやないが、明治時代の人にはさう聞こえたのさ。いや、現代の僕らだつて、豫備知識がなければ、「ヘップバーン」よりも「ヘボン」のほうが實際の發音に近いと思ふはずだよ。スペリングが

*Heppburn*だから、今の人はそのまま読んでしまふのさ。かういふのを「綴字發音」といふ。

健太 なるほど、綴字發音ね。それにしても、ローマ字もずるぶん工夫して作つてあるんですね。ところで、「カ行」と「ガ行」は日本語の假名では濁點のあるなしだけの違ひですが、ローマ字では*k*と*g*に書き分けますね。このへんはどういふ理屈なのですか。どうして、「ガ行」の文字を別に作らなかつたのですか。

高田 「カ・ガ」「キ・ギ」「ク・グ」と續けて發音してみてもごらん。口の形が同じになつてゐるだらう。

健太 「か・が」、「き・ぎ」。ふうん。そんな氣がしますね。

高田 「か」と「が」は發音するときの口の形が同じなんだ。ただ、「か」は喉が鳴らない。「が」は喉が鳴るんだよ。いや、かういふ言ひ方は學問的には必ずしも正しいとは言へないかも知れないが、大雑把に言へばさういふことなんだ。だから、昔の日本人は、「ガ行」は「カ行」から派生したものだと思つて、特に別の假名を作らうとは思はなかつたのさ。日本語では、「あまがさ(雨傘)」で「かさ」が「がさ」になるやうに、濁音が清音の補助的な役割をすることが多いから、特にさう思つたのだらうね。

健太 「無聲音」と「有聲音」といふことですか。

高田 おお。難しい言葉を知つてゐるね。簡単に言へば、「無聲音」は喉が鳴らない。「有聲音」は喉が鳴るんだ。

健太 なるほど。「カ・サ・タ・ナ」は喉が鳴らない、「ガ・ザ・ダ」は鳴るといふわけですね。

高田 一つ違つた。「ナ」は喉が鳴る。つまり、有聲音なんだ。健太 ふうん。さうか。「カ」には「ガ」といふパートナーがあるのに、「ナ」にはその相手があるませんものね。

高田 うん。ローマ字で言えば、「ナ行」「マ行」「ラ行」の R, N はパートナーがゐらないんだ。これはみんな、清音ではあるが、有聲音なんだ。清音イコール無聲音、濁音イコール有聲音といふわけではないんだよ。「ア行」は母音だし、「ヤ行」と「ワ行」の y と w は半母音だから、ここでは觸れないでおくがね。

そこで、ちよつと表にしてみよう。
こんな具合になるんだ。

無聲音 k, s, t

有聲音 g, z, d, n, m, r

健太 「ハ行」と「バ行」が抜けてますよ。

高田 うん。それが問題なんだ。「ハ」と「バ」を發音し

てみると、氣づくことがないかね。

健太 「ハ」、「バ」。あれ。口の形が全然違ひますね。「ハ」は口を開いたままなのに、「バ」は唇が閉ちますね。

高田 そこがポイントなんだよ。

(つづく)

(たかだいう・豫備校講師)

聖書に於る國語問題（その八）

「憂へしむ」——「憂ひしむ」

松岡 隆範

新約聖書の文語版、大正改譯、でコリント後書第二章を讀んでゐて、第一節から第七節迄の異様な感じに引掛り、先へ進めなくなつてしまつた。

「われ再び憂へしむ」もて汝らに到らじと自ら定めたり。我もし汝らを憂ひしめば、我が憂ひしむる者のほかに誰か我を喜ばせんや。われ前に此の事を書き贈りしは、我が到らんとし、我を喜ばすべきもの、反つて我を憂ひしむる事ながらん爲にして、汝らは皆わが喜悅を喜悅とするを信ずるに因りてなり。われ大なる患難と心の悲哀とにより、多くの涙をもて汝らに書き贈れり。これ汝らを憂ひしめんとにあらず、我が汝らに對する愛の溢るるばかりなるを知らしめん爲なり。

もし憂ひしむる人あらば、我を憂ひしむるにあらず、幾許か汝ら衆を憂ひしむるなり。（幾許かと云へるは、われ激しく責むるを好まぬ故なり）かかる人の多數の者より受けたる懲罰は足れり。されば汝ら寧ろ彼を恕し、かつ

慰めよ、恐らくは其の人、甚だしき愁に沈まん。」

第一節の「憂」は軽く「うれへ」と讀み直してしまへばすむが、第二節以下の「憂ひしむ」の連續にはギクツとした。實に不自然ではないか。

聖書には同じ言葉が何回も續く處が多くある。だからをかしい言ひ方が表れると異様に目立つのである。此處では短い段落のなかに「憂」、「憂ひしむ」が九回もつづく。此等はすべて「憂へしむ」でなければならぬであらう。私は文法に疎いので一々文法的に考へて讀む事はない。時にはじめて文法を調べて見る。

調べて見ると文語「憂ふ」は下二段の活用で「ふ」と「へ」に活用するのである。「ひ」は出てこない。

使役の助動詞「しむ」は活用語の未然形に付く。さうすると「憂へしむ」しかない。

但し名詞の場合辭書には「憂」の形も一應出てゐるが、鎌倉時代に漢文訓讀から始つた誤用だとある。此の誤用は非常に普及して長く續いてゐる。いかに普及してゐても誤用は誤用である。

大言海では「ウレヒ」の形は全く記してゐない。「うれふ」「うれへ」の活用が本来の形である。

大正改譯には、文法的、語法的にをかしい處が多々ある事に私は以前から氣が付いてゐたので、すく「明治元譯」を調べて見た。

「われ愛を以て再び爾曹に至らじと自ら決たり。若われ爾をして愛しめば我愛しむる所の者の外に誰か我を喜ばせん乎。われ前に爾曹に書遣しは我いたらんとき我を喜ばす可もの反て我を愛しめんことを恐れて也。なんぢら皆わが喜樂を己が喜樂とすることを信ずる也。われ大なる患難と心の哀痛あるにより多の涙を以て爾曹に書遣れり。此は爾曹をして愛しめんとするに非ず。我なんぢらを愛する事の深を知しめん爲なり。もし愛しむる者あらば我を愛しむるに非ず。略なんぢら衆を愛しむるなり。如此いふは我これを甚しく責ることを欲はざる也。斯る人は多の人の責を受けること已に足り。然ば爾曹は反て彼を赦し慰むべし。恐くは彼はなほだしく愛に沈まん。」

明治元譯で第一節と第七節に名詞として「愛」が出て來るが、動詞はすべて「憂」と正しく用ゐてゐる。

名詞の場合に限り「愛」が出て來るのは、此の誤用が既に一般に普及してしまつてゐたからである。

「愛ふ」と云ふ語は注意しないと間違へやすいむつかしい語なのである。「愛ふ」は下二段で「フ」「へ」にしか活用せず、名詞形の「憂」であるといふ事を意識してゐないといけない。

文語譯聖書では「愛ふ」は舊新約を通してざつと三十箇所位は出て來る言葉である。此れが明治元譯では正しく用ゐられてゐるのに、大正改譯ではすべて誤つて用ゐられてゐる。

大正改譯の多くの缺點のなかでも目立つ處である。

聖書の文語文は新約の大正改譯で大いに良くなつたと云ふ様な事が言はれてゐるが、それは俗説であり迷信である。語法的に悪くなつた處が多くあるからである。

「再び愛をもて汝らに到らじ」より、「元譯の「愛を以て再び爾曹に至らじ」の方が正確である。「再び」は「到る」にかかるとのだから。

大正改譯の「われ前に此の事を書き贈りしは」より元譯の様に「われ前に爾曹に書遣しは」と相手をハツキリさせてゐる方が良いし、改譯の「わが喜悅を喜悅とする」より

も元譯の「わが喜樂を己が喜樂とする」と「己が」を入れ

た方が良いし、「憂ひしめんとにあらず」より元譯の「憂へしめんとするに非ず」の方が明晰だらう。「我が汝らに對する愛の溢るるばかりなるを知らしめん爲なり」よりも

元譯の「我なんぢら^{ワガ}を愛する事の深^{フカキ}を知しめん爲なり」の方が簡潔ではないか。「幾許か汝ら衆^{イクバク}を」より元譯の「略なんぢら衆^{スベテ}を」の方が判りやすいではないか。

大正改譯はすべてが此の調子で、元譯の方が簡潔で明晰で文體がガツチリしてゐる。

元譯は漢字が多く、漢字の使ひ方もむづかしいが、此れは漢譯聖書を參考にする處が多かつたからである。又、變體假名を多く使つてゐる。

大正改譯は漢字の用法を單純化し、變體假名を一切使はない様にしたから読みやすくなつたといふだけで、文章が良くなつたわけではない。文章は元譯の方がゴツイが強い。

元譯は主語、述語、修飾語、被修飾語、等の相互關係が論理的に明晰になる様に語順が考へられてゐる。

大正改譯では語順が不安定で語と語の相互關係が緊密を缺いてゐる。

大正改譯に當つた日本の牧師、聖書學者達は、明治元譯を完成させた人々に比べて、國語の學力は劣つてゐる様で

ある。

(平成二十年一月)

(まつをかたかのり・彫刻家、元造幣局工藝管理官、本會理事)

岩波書店の用字觀

萩野氏は昨年の著書「旧かなづかひで書く日本語」の一五四—一五五頁で、新潮文庫卷末の注記を紹介して、同文庫が谷崎作品の假名遣の改變改竄を「原文を尊重する」という見地に立ち」行なつたことを指摘し、「出版界で『原文尊重』といふ言葉は、なにか不氣味な意味を帯びてゐるやうです」と書いた。さらに「岩波書店は假名遣に關しては知識も關心も完全に失つてゐるやうです」と述べてゐる。その岩波書店の宣傳誌「圖書」の本年二月號卷末「こぼればなし」に、「本号から新連載」が始るとし、約七十年前の「小誌に掲載された著名人の文章を、用字は当時のままに、ただし『新字・新かな』に改め再録してお届けします」と書いてある。字體と假名遣を改變しても「用字は当時のまま」とはどういふことかと編輯部に問合せたが、返事が無い。

(上田博和)

活字時代の終焉

上西 俊雄

活字は movable type だと聞くと確かに生きてみるといふ感じがする。活字は宋の時代に粘土を固めたものが初めてと傳へられ、金属による鑄造活字は李氏朝鮮で用

みられたとあるが、現代に繋がる活字は十五世紀のグーテンベルクに始る。鑄造といふ行程を伴ふので寫眞植字組版に對して活字組版は hot-metal typesetting 或は單に hot typesetting と呼ばれた。寫眞植字組版は cold type setting すなはち CTS であり、コンピューター組版も CTS である。昭和六十年バーチフィードは OED の補遺の最終巻の序文で「印刷業の一時代の掉尾を飾るもの」と述べてゐる。日本の活版印刷の一方の雄であつた三省堂の場合、昭和六十三年の『大辭林』刊行が鑄造活字の事實上の終りであつた。オックスフォードにバーチフィードを訪ねた昭和六十年四月、新版の編集長ワイマー氏の後ろの壁に貼つてある OED の擴大頁は項目を解析して様々な色で塗り分けされてにぎやかに感じたけれど四年後に新

版を見たときは語源欄などさびしいと感じたのを覚えてゐる。鑄造活字であれば、どんな文字でも對應できたし、母型が無ければ、その一本だけを木で彫つて間に合はすこともできるが、CTS ではさうは行かない。外國語はギリシャ文字以外總てラテンアルファベットに轉寫されたのであつた。情報交換の時代には文字はコードの問題になるので字種の整理がせまられるわけだ。

平成二十年一月十日の新聞で、文化審議會漢字小委員會が静岡、岡山、福岡の「岡」、熊本の「熊」、茨城の「茨」、栃木の「栃」、埼玉の「埼」、山梨の「梨」、岐阜の「阜」、奈良の「奈」、大阪の「阪」、愛媛の「媛」、鹿児島 of 「鹿」の十一字を常用漢字に加へる方針であること、「韓」「彦」のやうによく使はれる漢字を常用漢字にするかどうかは個別に検討すること、パソコンなど情報機器の普及で日常生活で使はれる漢字が増へることも考慮して、使用頻度が高いのに、新常用漢字表に収まりきらない漢字として「準常用漢字(假稱)」の新設も検討することが報道された。「讀める」「分かる」「書ける」といふ三要素を常用漢字、準常用漢字共通の條件とするが、常用漢字は情報機器の助けを借りずに「手で書ける」、準常用漢字はパソコンの變換機

能など「情報機器を利用して書ける」ことを基本とするとしたとある。文字に對する認識の變化を伴ふもので、活字を桎梏としてきた國語政策の見直しが求められてゐると思はざるを得ない。我々は活字時代の二度目の終焉、そして新たな形での復活に立會つてゐるわけだ。

戦後の國語行政は鑄造活字時代の技術的制約からの脱却を目指したもので明らかに漢字制限が目的であつた。しかし字母の制限といふ思想は假名にも及んで同音の假名を贅澤とみたので、漢字制限は假名の制限を伴つた。この制限字母による表記を傳統的表記に對して文部省表記と呼ぶことにする。

上述の文化審議會の方針轉換は文部科學省の意向なのか經濟産業省の意向なのかつまびらかにしないが、この間の負の遺産とも言ふべきことがらを十分見据えてかかつて欲しいと願ふものである。

第一に漢字を書いたり、入力したりするとき、常用漢字かどうか氣にする人はゐないといふこと。入力できるかどうかは、JIS規格にあるかどうかの問題だから、表外字も

表内字も無關係だ。やつかいなのは表外字は正字體しかないのに表内字には新字體といふものがあることで、字體を通すなら正字體しかない。しかし文部省表記に慣らされた我々は字體を混用しがちである。公共放送のテレビでさへ福田首相の福と額賀福志郎の福のやうに同一の字種で字體を混用することがある。いづれ正字の方に落着くまでの過渡期の現象であらう。それまでは、學力テストなどは正解が二つあることにしなければなるまい。

假名の方の字母制限は技術的に要請されたものではなかつた。いや精確に言へば、一バイト假名は制限があつた。銀行のタッチパネルの五十音圖は今でも同音の假名のキエがなく、ヲも使はないのが原則だ。しかしこれは機械の問題。漢字制限のために援用された表音主義から音と假名とは一對一であるべきだと考へたためではあるまいか。ハードが進歩して一バイト假名にこだはらなくてもよくなったのに文部省表記のままに假名字母の制限を守る人は多い。四假名すなはちヂジとツズの書分けも表音主義からすれば不合理なことであつた。傳統的表記であれば、語によつて書分けが決まつてゐたのを、戦後はジズを本則として、ヂツは連濁のやうな例外的場合に限ることにした。戦前な

ら稻妻はイナヅマであった。昭和三十一年七月五日の國語審議會報告では語原意識はもはやなくなつてゐるからとの理由でイナズマと、いはば誤記の方を正しいとしたのである。

しかし、昭和六十一年七月一日の内閣告示「現代仮名遣い」では語原意識は一概にいへるものでないことを認めてイナヅマでもよいとした。手許の辭書では兩方の形で立項してゐるが、イナズマが本項目である。假名漢字變換も兩形に對應してゐる。先日「躓く」をツマヅクと入力して變換されないので辭書のみたらツマズクでしか立項されない。調べてみると「躓く」のツマヅクも同じときに許容されてゐる。この不統一はどうしたことか。漢字制限の時代には辭書出版社は文部省の普及局の役割を果たしてゐたが、假名について復古するのはためらふところがあるのだらうか。考へてみれば國語辭書の編者は戦後の國語行政を領導した人であることが多い。まさか辭書が文部省の基準に反してまで表音主義に殉じようといふわけではなく兩形を立てるのが馬鹿馬鹿しかったのではなからうか。戦後、文部省表記になつたとき、學のある人は漢字を知つてゐることが却つて仇となつたわけで、親の權威を損なふこと甚だしかつたであらうと思はれる。今、辭書がこれでは世の中に權威といふものがなくなるではないか。第一、テスト

のときに採點のしやうがあるまい。いや間違つた方を正解としてゐるわけだ。

もう一つ、同音による書換や代用術語の問題。今、市中にある初級者用國語辭典で「楕圓」を引けば「長圓の古い言ひ方」と出てゐる。「三絃」はなく「三弦」だ。

「關數」か「函數」かがウイキペディアでは大問題だ。元來 function の音譯。字音のレベルでは關はクアンで函はカンだ。友人の數學者から次のやうなメールを貰つたことがある。

先日は「放物線」のことをうっかり「パンムルソン」といひさうになりました。

朝鮮語では「拋物線」で、「ポムルソン」といひます。

「關數」も「クァンス」では通じず「函數」(ハムス)です。また新字體では「欠席」と書きますが、韓國語では「缺席」で「キョルソク」といひます。「欠」は韓國語では「フム」と讀んで疵のことです。

『博士の好きな數式』では「函數」であつた。漢字文化圏からの留學生も困るはずだ。

(かみにし)としを・擴張へボン式提唱者、本會評議員)

蛾と蟻の「混同」

中村 保男

今では日本ばかりか世界に名だたる小説家、芥川龍之介の警句集「侏儒の言葉」の中の一字「蛾」が「蟻」へと幾つかの版で多分、誤植され續けてきたといふことが、同作の發表された大正二年から、平成二年頃に批評家、福田恆存氏によつて喝破されるまでの、七十年以上の長きに互つて、世に知られることなく、「葬られて」ゐたらしい。

僕は未だに覺えてゐる。月明りの仄めいた洛陽の廢都に、李太白の詩の一行さへ知らぬ無数の蟻の群を隣んだことを！

この芥川の文章中の「蟻」を福田氏は「蛾」と讀んでゐたのだ。

ここが肝腎な點なのだが、福田氏自身は上のことを結論として明示はせず、仄めかしてゐるだけである。氏がおそらく確信をもつて洞察したとほりのことを公然と明記してゐたならば、氏の説といふより論は「文壇」に大波紋を投げかけてゐたらう。氏の狙ひはそんなところにはなく、絶

對確實ではないが、物證はないものの、これが結論だと叫ぶ謎解きの答へをちらつかせてゐた心證を淡々とあぶりだすことにあつたわけだ。そのものずばりを名指さずに結論を出すこのやり方を氏は自ら入り組んでゐると形容して、「どう説明しようか頭を悩ましてゐる」と告白してゐる。だが、氏は見事にこの難事を解くことに成功したのだ。

ここで、氏のご子息、逸さんが以上のやうな顛末を記した氏の絶筆原稿を氏の没後に発見して、いたく感動し、文春の編集部に渡したといふ事情を記しておくべきだらう。逸さんはなぜ感動したのか。その答への一は、氏がこの原稿を書いた平成二年の數年前に腦梗塞を患つて暫く氏の言葉が對話に支障をきたすほどだつたのに、原稿の「出來榮え」は素晴しく、完成の域に達してゐたことであり、第二に、結論を明かさずすべてを語るといふ論法がひとときは訝えてゐたことにたいしてである。

そもその事の發覺から話すと、福田氏は文春から御自身的全集を出す時、作中の芥川龍之介論の芥川からの引用文中に誤植がある事に氣づいた。校正中に氣づいたのではない。もう本が出来あがるばかりになつて修正の餘裕がなくなつてから氣づいたのだから大變だ、福田氏は早速、氏の校正を擔當してゐた文春の郡司勝義氏に抗議の手紙を出

し、郡司氏もたまげて、調査に乗り出し、日本近代文學館の明石一郎氏にお伺ひを立てたところ、問題の一字は、元版の「芥川龍之介全集」では「侏儒の言葉」の中には收められなかつたが、その一年後の同全集第六卷に収録されてから、以後、版元を異にする幾つかの全集でこの収録方式が踏襲された。問題の、福田氏が引用した文はすべて岩波の芥川全集（昭和二年）に據つてをり、それには「蟻」となつてゐたところはすべて「蛾」になつてゐるのに、やはり岩波刊の普及版芥川全集や他社の版などでは、それが「蟻」に訂正され、混亂を呈してゐた。それをどちらが正しいのか、決着をつけたのが福田氏だつたことになるわけだが、どこにも氏はそのやうな言ひ方はしてゐない。大悟の人は、さういふ枯淡の境地に達してをられたのであらう。

福田氏が「説明しにくい」と述懐した事柄を私がうまく語れるわけがない。が、お詫びを兼ねて、半ば隠された結論とも言ふべきものを、論中で福田氏が引用した郡司氏の言葉に代辯させてもらはう。「結論から先に申し上げますならば、私の馬鹿正直の一語につきます」「五、六箇所もある『蟻』の字をすべて『蛾』と訂する力量と度胸の持主は、筆者芥川を措いて他には考へられません」

次に、福田氏の論が眞に言はうと目指してゐたのは、次

會員通信

のことではなかつたか。日本人に向けて阿川弘之氏がかう

拜復 先日は御丁寧な御手紙、有難う存じます。

問ふのを福田氏は最後に引用し、締め括つてゐる。少し飛

早速御手紙を差上げねばなりませんの心ならずも延々に
なり申訳御座いませぬ。

躍するが、埋めないで置く。「あんた方、この滅茶苦茶な『現代かなづかい』なるものを本當に理解し本氣で容認して使つてゐるのか。あなた方の創り出す言語藝術の根幹を成すものは日本の國語であつて、作家なら自分の國語の正書法に關し、一通りきちんとした説明ができなくてはなるまいと思ふが、おできになるのか」

授、之より私が入會するに致つた其経緯に就て申し上げます。中學の頃、平生喋つてゐる方言とテレビ、ラジオで聽く言葉との違ひを認識して言葉と云ふものに興味を持つ様になりました。爾來是まで何の氣無く見聞きしたり、遣つて

まつた理由を「大膽に」明かしてゐるので、一言觸れておく。(殆ど如何なる時でも)「私は自分の誤字、誤植を放置して願なかつた」。

みた言葉を見直し、幾つか氣になつた事があるのです。日本語で表現し得る處を態々片假名語に置換へてゐはしまいか。熟語の一部を平假名にする表記は一體何なのか。未だありますが今回は餘り關係が無いと思はれたので省きます。

この論は昨年十月號の文春に掲載された後、十一月に麗澤大學出版局より發刊された久しぶりの『福田恆存評論集』初回第八卷配本〔全十二卷、隔月發行〕の第二回配本第十二卷に収録される。豫定通り行けば一月號になる。全卷、勿論、正假名遣による。奇特な本である。

(なかむらやすを・翻譯家、本會評議員)

片假名語は恐らく歐米への憧れ又は眞新しい響から遣ふのだらうと思ひました。私自身も眞新しいものは好きでしたが、古くから使はれ續けて來たもの、殊に日本古來のもの魅力には勝らず、鼠色をグレイと云ふ片假名語に言換へる事等に對して、恰好良いとか御洒落とか云ふ感情は懷きませんでした。寧ろ日本語を輕んずるなど云ふ感情が興り、何氣無く遣つてゐたトイレ、エアコン等の類は一切遣はな

くなりました。御手洗、空調と云ふ言葉がありますから。何彼と泰西の文物を有難がつたり、新しい、新鮮と云ふ言葉が良いや素晴らしいの同義語の様に使用する風潮は如何なものかと思ひます。日本にも良いものは澤山あります。古くから受継れて来たものには新しいものがない洗練があります。何故其を認めようと思ひました。

混書きに就ては何の爲に行はれるのか全く解りませんでした。手書きの場合なら、字が分らなくて仕方無くさうする事もあるだらうと思ひましたが、活字に於てと云ふのが謎です。見映えが悪いだけでなく、意味が不明瞭になります。百害あつて一利なき混書きが何故行はれるに到つたか、其理由を知つたのは福田恆存氏の「私の國語教室」に出會つてからで、もう少し先の事です。

高校に入るとインターネットを使始め、日毎日本語の起源、語源、外國語、漢字等に就て検索してゐました。色々と言葉を巡つてゐる内、國語問題を扱ふ所に辿着き、過去に國語改革なるものが行はれてゐた事を知つたのです。國語問題協議會の存在も其時に知りました。併し先づ何より往時の日本人の遣つて來つた此漢字、假名遣を遣ひこなしたいと思ひ、参考書籍として紹介されてゐた「旧字旧仮名人門」と云ふ本を買ひ、日々の授業内容や覺書等を正字正假名遣

で書く様にしました。そして徐々に其整合性合理性に氣付き、之まで行つて來た現代假名遣は其に較べて何と矛盾の多い事かと思ひ、現代假名遣の存在に疑問を持ちました。そこで久振りに例の國語問題を扱ふ主頁を訪ね、國語改革に關する解説文を読み、現代假名遣への疑問は國語改革そのものに對する疑問に變りました。

より詳しく知る爲に主頁に紹介されてゐた福田恆存氏の「私の國語教室」を入手し、學校の休時間、自宅、外出先、暇さへあれば讀んでゐました。讀進めるに連れ、此改革に對する怒りは押へ難くなりました。之の何處が改革なのか、出鱈目で於粗末で、一體國語を何だと思つてゐるのか。何が發音に基いてだ、何が當用漢字だ、何處が常用なんだ、と考へれば考へる程頭がをかしくなりさうでした。今後一切新字新假名遣は用ゐまいと決めて六年ばかり経ちますが、已む無く用ゐねばならぬ事が度々あり、苦痛でなりません。

明らかに間違つた事をさも當然の如く押付られる辛さは言葉では言ひ表せません。併し其は仕方の無い事なのです。日本人の多くは國語問題の事を知らないのです。我々日本人にとつてとても重大な問題でありながら、餘りに知られてゐないのです。私は中學の頃に芽生えた言葉に對する興

味が切掛けて國語問題を知りましたが、多くの人は過去に
 どれだけ無茶苦茶な事が行はれたかを知らぬ儘生涯を閉ち
 るのです。

之まで獨りて悶々としてみました、其儘では何も變らな
 いと思ひ、此度協議會への入會を決意致しました。今後共
 に此問題に取組み、知識を深め、多くの人に知らしめたく
 思ひます。

平成二十年三月三日

吉川涼太

谷田貝常夫様

机下

追伸 生年月日は昭和五十九年六月二十九日です。

書評 愛甲次郎『世にも美しい文語入門』

桂 重俊

現代かなづかひ、當用漢字、ルビの廢止といふ國語審議
 會による國語改悪は國語問題協議會他多くの反對にあつ
 た。その後JIS漢字の制定もあり漢字の流通については
 大體舊に復しつつあると考へてよいであらう。歴史的假名
 遣ひの見直しの爲にこの度適切な本『世にも美しい文語入
 門』が海竜社より出版された。著者は通産省、外務省勤務、
 クエート大使、ハーバード大學フェロー、をされ、言語學
 にも堪能な方で、「文語の苑」代表幹事でもある愛甲次郎
 氏である。

第一章 美しき「文語文」の生ひ立ち 第二章 日本人
 の魂を傳へる文語の魅力 において先づ言葉は民族の魂で
 あることをラテン語、アラブ語、日本語について述べる。
 そして日本語には書き言葉の「文語」と話し言葉の「口語」
 があり、文語は推敲して磨かれたものであつたことが書か
 れてゐる。正しい五十音圖といろは歌についても述べてあ
 るが現行教育に用ひられてゐる五十音圖が不完全なもので
 あることに觸れられてゐないのは残念である。明治以後口

語でも文章が書かれるやうになり、第二次大戦後占領軍の方針もあつて漢字制限、新假名遣ひの採用を内容とする國語改悪が強要された。このままでは文語文は死語となるといふ問題意識をのべ、短歌、俳句は文語を基調とするもので文語を捨てたため「詩」は衰退しつつあると説いてゐる。ただし鷗外、漱石等に始まる原文一致體文章が創られたことも忘れてはならないであらう。

第三章は實踐編で多くの例文が集められてゐる。「自然と人生」「瀧口入道」「徒然草」「平家物語」「方丈記」「萬葉集」「十八史略」等我々の年代のものにとつては懐かしい中學で學習した名文がならんでゐる。また「あふげば尊し」「夏は來ぬ」「荒城の月」「春の小川」「ローレライ」「青葉の笛」等の小中學校で習つた文語の唱歌が解説と共に並んでをり、琴線に觸れる。

ひとつ氣になつたのは例文中の語句に對して現代かなづかひでルビがあつてあることである。特にハ行活用の動詞、形容詞に對して平假名に片假名でルビをふつてゐるのは惜しい。一章を設けて文語文法の解説を行つてハ行活用の読み方書き方を詳説し、例文に對しては文語でルビをふればよかつたと思ふ。

本書の例文は既に古典となつた文章であるが、著者が代

表を務める「文語の苑」には多くの現代文語文が載つてをり、愛甲氏も中國紀行、鞍馬紀行等をのせてゐる。本書の讀者は「文語の苑」の文章をも讀まれることを希望する。本書が多くの人々の座右の書となること、そして日本の國語において歴史的假名遣ひに現代假名遣ひと同等の地位が與へられるやうなることを願つて筆を擱く。

(かつら しげとし・本會評議員)

書評 山崎馨「日本語の泉」和泉書院刊

上村 知己

「日本語について世間の皆様があまり御存じではないやうなことを、努めてわかりやすく、簡明に書いてみよう」(「むすび」より)との意圖により著されたもので、讀者は國語といふ大河の源流、すなはち汲めども盡きせぬ「日本語の泉」の姿が感得できるやうにと誘はれる。

本書、帯の一節、

「目次はお出かけの姿、内容はふだん着のまま、読者の皆さんに語りかけます。」

其の目次とは左の如し。

「音と訓、片仮名と平仮名、五十音図、いろは歌、あめつちの詞、ふねとふな、動詞の自他と複合、國語改革のこゝと、送りがたと略字、てにをは、君が代の歌、万葉仮名について、上代特殊仮名遣の発見、上代特殊仮名遣と橋本進吉、上代特殊仮名遣の光彩、上代特殊仮名遣の応用、上代特殊仮名遣の消滅、推古期遺文、五世紀の金石文、魏志倭人伝、母音法則(A・B・C・・・J)の話、情意性の形容詞」

本會の會員にはお馴染であらう國語表記の基本的な姿に

ついて充分に行届いた解説に接し、昨今猖獗を極める物言ひ「立ち上げる」の語法上不可なることを知り、紛糾することの多い「君が代」解釋について大いに啓發された後、本書の半ば以降、語り口こそ「ふだん着」とは言へ、付合つてこちらも樂な服装でといふわけにはいかなくなる。橋本進吉博士の偉業を繼承する「國語學」によつて、我々の言語を形成する微細な諸法則が究明されるのである。服装は不問に附しても背筋だけは正しておいたほうがよい。

著者、山崎馨先生は國語學者としての業績(「形容詞助動詞の研究」)に加へ、會津八一の評釋者としても知られる。注目すべきは、いづれの著書も歴史的假名遣をもつて綴られてゐるといふことであつて、本書もまた然り。書中引用される小泉信三の金言「書き言葉は、死んだ人とまだ生れてこない人とを結ぶものである」を考へ併せると、世に多い「幅廣い讀者に、特に若い人たちに讀んでもらふ爲に(現代仮名遣い)で表記する」といふ言譯は、結局のところ、若い人々はおろか、未だ生れぬ將來の日本人の爲にはならぬし、その將來の日本人が祖先の書いた言葉に親しむ通路を遮斷することにもなるのである。あの戦後の改惡以來随分長きに涉つて、國語の傳統性、合理性を稱揚する良書が「現代仮名遣い」で表記されるといふ矛盾に我々は

しばしば煮え湯を飲まされたが、本書が世に廣く讀まれることにより、其の惡弊も幾分かは改るのではないか。山崎先生の御見識に敬意を表します。

(うへむら　ともき・本會參事)

和歌投稿

有田　宏雪

燈火親し知のかたまりの舊漢字

眞つ新な大辭典割る菊日和

存へていまある不思議冬紅葉

父子墓に濤音およぶ迢空忌

希典の殉死うかめり冬の薔薇

(雅號を前號に誤りたること御詫びします—編輯部)

安東　路翠

〔マ行冠〕

宇野精一先生と白河の關を尋ぬる

學び來て師と尋ね入る白河の關は乾坤霧も霽れゆく

燈籠流し「核廢絶」

み柱の集ひに齋く吾が國は刃も彈も無き蜻蛉島

小林寺遺跡へ

麥蟬と盜石の路越えゆけば花桐に繋がる牛の安き眸

天木香樹下、太子の「無漏と虛假の世」を再び偲ぶ

目瞬ぐ初夏のみ牟呂の水しぶき地衣苔青葉這へば洗へり

熊野本宮大社 おほゆめのほら 「大齋原」にて

元宮の神ツ溪川せ、らぎて明けゆく大地に清やかに響む

〔ヤ行冠〕

神樂の朝

杜より擴がり來たる笛太鼓神も和みて調べに立てり

眞夏劇

言ひ揚げて讀め勝ち夫婦の野外劇鷄も鳴き賑やかしける

持御前と大歳神社燈明の夜

揺らかせば神の域なり大歳の社の鈴は闇を擴げり

森舞臺

吉し森の登米の里の能舞臺鴛も和しワキに謠へり

齋島、蝦夷鹿の群れの中、神職と日本猿の夜

夜の杜の猿猴の群れ鎮みたり鈴の振音と齋王の祈りに

〔ラ行冠〕

奈良博物館にて

落剝の尊き像なるその彩を和綴ぢの古書に見入る悦び

眞言宗御詠歌衆

りんりんと御詠歌響く高祖の法式白嶺續く深山の頂

安藝の嚴島へ渡る

瑠璃色の鳥影もあり經文は金字にありし平家納經

新春斯文會講義【録田正先生】

禮學び心安かる春なればつとに麗しき白梅の馨ぐはひ

梁山の武后陵、無字稱徳碑を前に

樓閣と石柱續く武后陵杏花の憂ひ梁山に満つ

〔ワ行冠〕

御柱祀り

和締め卷く男の子等が意氣背に乗せて波立ち走る諏訪の御柱

伊勢、猿田彦神社にて

率手なるや炯眼のふるひ八衢に行く手導く老身の神

「石の寶殿」にて

呻吟けるや蝦蟇なり夏野の際に立つ入道雲に今に眞向ふ

惠那山

惠那山

惠那山をおぼろに映す盃にどよめき祝ふ齋庭の式事

九十九鳥成婚祕譚

乙姫を祀る飛鳥齋れゆけば九州の男神が沖に見るやも

後書

この一月七日に前會長の宇野精一先生が九十九歳といふ御高齢で亡くなられた。急遽多くの方から追悼文を書いていただいて特集したので、宇野先生の足跡が立體的に偲ばれよう。

その涙も乾かぬ二月二十四日、常任理事の萩野貞樹さんが癌に倒れられた。六十八歳の若さであつた。本協議會には創立に近い頃から學生として参加、高名なる諸先生の聲咳に接せられたことを誇りとされてゐたが、同時にかなりの手傳ひもしてゐたやうで、本會の『十五年史』は、聞き書も含めほとんどの内容は萩野さんが書いたものである。そこで『四十五年史』もかなりの部分を擔當してもらつたが、一口に四十五年と言つても、十五年史以來の三十年もの空白を埋めるのは大變なことであるとは容易に想像された。ところが理事會議事録その他の諸資料を完璧といつてよい程に保存されてゐたのである。お蔭でまことにすばらしい本が出来上つた。二年前のことであるが未だに感謝に堪へないでゐる。

萩野さんの眞價は、信念の鞏固なることと國語の學識の並ならず深いところにあつた。文化廳から「敬語の指針」

なる、敬語とは無縁とさへ言へる考へ方の、愚劣なる教育方針が打出され、その意見聴取に對しては前々より敬語についての造詣の深い萩野さんを何よりの頼りにしたものだ。文化廳ならぬ萩野貞樹著『ほんとうの敬語』（PHP出版）こそが、現在の敬語に關する決定版といへるであらう。

五年前に「文語の苑」なる、文語を今に活かす活動が始り、萩野さんにも参加してもらつた。そのお茶の水女子大での勉強會では、現代文を文語譯する試みが何回か行はれたが、萩野さんの譯文は他の者の水準を遙かに凌ぐものであつた。なにしろ古語の語彙が「すがひすがひ」に的確に使はれる。古語が現代に無理なく蘇るのである。まことに餘人をもつてしては替へがたい國語學の泰斗であつた。その作品は「文語の苑」のホームページ中の「詩藻樓」にて何時でも讀めるので、ぜひ一度訪れていただきたい。

本會には、老人の去る一方で、若い人達の加入もふえてゐることは心強い。平成生れの會員が三名になり、昨年は十六歳の新會員が現はれた。しかも若い人達は、國語問題についてよく理解し、戦後國語問題の非なることに信念を持つてゐることが頼もしい。

（事務局長 谷田貝常夫）

〓 正統表記のための実用工具紹介 〓

「國語國字」通巻DVD

本會會報創刊號（昭和三十五年）より第一八五號（平成十七年）迄の全頁をDVD一枚に電子畫像掲載。

税込價格 一二、六〇〇圓 書肆 横濱五十番館 (<http://literature.jp/>) 發行

「今昔文字鏡」單漢字15万字版 ver.4.00 (CD-ROM)

UnicodeのCJKV漢字はもちろん、諸橋大漢和辭典收録の約五萬字、古くは甲骨文字から梵字、現代中國で使はれてゐる簡體字まで多種多様な文字を收録。廣大な漢字世界を體系づけ、檢索、印字等その用途は無限！

税込價格 二九、四〇〇圓 文字鏡研究会編 紀伊國屋書店刊

正統國語ソフト 「契沖」

ver. 19.0

歴史的假名遣、正漢字をパソコンで完全表現！Vistaでも使へる。字音假名遣による同音異義語の打分けにも對應。

税込價格 二八、三五〇圓 有限會社申申閣 (<http://www.ba.biglobe.ne.jp/~keichu/>)

平成疑問假名遣（平成十七年版）

字音はもちろん動植物・地名人名、さらには企業名や専門用語まで、注意すべき言葉をあまねく網羅。

最新の改訂は <http://homepage3.nifty.com/gimon/> 参照。

税込價格 一、五七五圓 國語問題協議會發行 紀伊國屋書店發賣

關聯電網

國語問題協議會 <http://kokumonkyo.jp/>

國語問題協議會傳言板 <http://d.hatena.ne.jp/kokugokyo/>

文語の苑 <http://www.008.upp.so-net.ne.jp/bungsono/>

文字鏡研究会 <http://www.mojikyo.org/>

旬申申閣 (「契沖」) <http://www.5a.biglobe.ne.jp/~keichu/>

横濱五十番館 <http://literature.jp/>

平成疑問假名遣 (高崎一郎) <http://homepage3.nifty.com/gimon/>

日本漢字教育振興協會 <http://www.kanji-kyoiku.com/>

石井式國語教育研究會 <http://www.isisiki.co.jp/>

ウェブ柵 <http://www.shigarami.net/>

高池法律事務所 <http://www.takaika.com/>

現代國語への處方箋 (蓮沼利夫) http://www.geocities.jp/kokugo_shohousen/

言葉の救はれ—福田恆存論 (前田嘉則) <http://logos.blogzine.jp/1/>

平成二十年五月十三日發行（第百九十號）
創刊昭和三十五年十二月一日（通卷百九十號）

編輯・發行 國語問題協議會

東京都大田區久ヶ原三丁目二十四の六
郵便番號 一四六・〇〇八五
電話 〇八〇・三四一・一五〇一
ファックス 〇五〇・三五八・六七二五
電 郵 0359089356@verymt.jp
URL: <http://kokumonkyo.jp/>